

西都市・埋蔵文化財発掘調査報告書

第 1 集

北水戸地下式墳

金倉上地下式墳

寺原第 1 遺跡

上野遺跡

1985・5

宮崎県西都市教育委員会

序

西都市は、象徴的な特別史跡西都原古墳群が示しますとおり、古代における政治文化の中心地として繁栄した地域で、これを裏付けるものとして各所に古墳等の多くの遺跡を散見することができます。

しかしながら、近年は、特に土木工事等の開発が各所で進められ、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査件数も、年ごとに増加の傾向にあります。

これら開発行為の中には、調査されないまま破壊された埋蔵文化財の例も多いと思いますことから、今後とも、より慎重な行政施策と対応の措置が講ぜられなければならないと思います。

このたび、これらの状況下において実施しました4件の発掘調査に関し、報告書としてまとめることができました。

ここに、その成果を西都市埋蔵文化財発掘調査報告書として刊行し、後世への研究資料として保存したいと思います。また本書が、広く活用されますことを期待するとともに、深い御理解と御協力を賜りました齊藤忠先生、並びに鹿児島医大の小片先生・川路先生に対し、深甚の謝意を表したいと思います。

昭和60年5月1日

西都市教育長 横山人見

例 言

1. 本書は、昭和55年12月から昭和58年12月までに、西都市教育委員会が実施した、北水戸地下式墳・金倉上地下式墳・寺原第1遺跡1号・上野遺跡1号に関する発掘調査報告書である。

2. 調査関係者は次の通りである。

調査主体

西都市教育委員会

教 育 長 横 山 人 見

社会教育課長 三 輪 公 洋 (57年度以降)

同 担当補佐 緒 方 吉 信

同 文化係 蓑 方 政 幾 (58年度以降)

調査員

西都原古墳研究所長 日 高 正 晴

同 主 事 緒 方 吉 信

同 係 蓑 方 政 幾

3. 本調査による出土遺物は、西都市歴史民俗資料館に保存し展示される。なお、金倉上地下式墳出土の人骨は、鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座に移管し整理研究中である。

4. 発掘調査は、北水戸地下式墳・金倉上地下式墳を日高と緒方が担当し、寺原第1遺跡・上野遺跡は、日高、緒方、蓑方が担当した。なおトレース等も同様に行った。

5. 本稿の執筆は、総説を緒方が本稿を日高が担当し、出土遺物は蓑方が担当した。編集は緒方が行った。

目 次

第1	総 説	1
第2	北水戸地下式墳	5
	1. 位置と環境	5
	2. 内部遺構	5
	第1図北水戸地下式墳実測図	6
	3. 出土遺物	7
	第2図北水戸地下式墳出土遺物実測図	8
	第3図北水戸地下式墳出土遺物実測図	10
	4. ま と め	11
第3	金倉上地下式墳	13
	1. はじめに	13
	2. 位置と環境	13
	3. 内部遺構	14
	第4図金倉上地下式墳実測図	15
	4. 出土遺物	16
	第5図金倉上地下式墳出土遺物実測図	17
	第6図金倉上地下式墳出土遺物実測図	18
	5. ま と め	19
	6. 金倉上地下式墳出土の人骨	20
	第7図金倉上地下式墳人骨配置図	28
	第8図大腿骨・脛骨の横断形	29
	写真1. 金倉上地下式墳人骨	30
	写真2. 同 上	30
	写真3. 同 上	31
	写真4. 同 上	32
第4	寺原第1遺跡1号住居址	33
	1. 遺跡の位置と歴史的環境	33
	2. 遺 構	33

	第9図寺原第1遺跡1号住居址実測図	35
	3. 出土遺物	36
	第10図寺原遺跡1号住居址出土遺物実測図	37
	4. ま と め	38
第5	上野遺跡1号	41
	1. 調査の経緯と環境	41
	2. 遺 構	41
	第11図上野遺跡1号断面図	42
	第12図上野遺跡1号実測図	43
	3. 出土遺物	44
	第13図上野遺跡出土遺物実測図	45
	4. ま と め	46
第6	図 版	49
	図版1. 北水戸地下式墳	49
	図版2. 金倉上地下式墳	51
	図版3. 寺原第1遺跡1号住居址	53
	図版4. 上野遺跡1号	55

総 説

西都市の面積は、437.56km²と広大な市域を形成するが、約70%は山地帯であり、その広がりには東西に約25km、南北に約40km、市周囲の境界料数は実に126.5kmにも及んでいる。

そしてその北部は、東臼杵郡南郷村と椎葉村、西部は西米良村、南部は東諸県郡国富町と宮崎郡佐土原町、東部は児湯郡木城町高鍋町新富町に隣接している。

地質は、一般的に粘土質層と軟岩質層からなり、山岳地域は岩石質が大半を占めている。また九州山地から突出した幾条かの岬様台地は、平坦地に隆起する台地と連なり、市の中央部を屏風の如くに囲み、その内を一つ瀬川の本流と三財川・三納川の支流が貫流して豊かな農地を造出している。

このような地勢の中にあつた住民は、古くから山岳地帯を林産物の豊庫や焼畑地に変え、岬様台地等は、肥沃した土地を生かしての畑作が営なまれ、平坦地農耕とともに豊かな農林業の生活を潤してきた。

これらの営みは、いつの時代にその祖を求めるとは決するに難があり、今後の研究を待たねばならないが、日本最大と目され311基の古墳が西都原に築造された古墳時代には、すでに日向国の中心地として、政治・文化の栄えた事は疑う余地がない。

さらに西都市内には、奈良時代に日向国府が置かれ、日向国分寺も建立されている事は、これらを総合的に証するものであり、その為か、西都市は生活の場に適し、古代からの人類が居を構え多くの文化遺産を残している。

近年、地域の開発や急激な生活環境の変化からか、永年に培われた文化遺産、特に埋蔵文化財は土木工事等が各地ですすめられ、中には、無届によって調査も実施されないまま破壊された遺跡も少なくはない。

このような事から、今後とも文化財保護行政の責務は重く、より慎重な行政施策が求められ、地域住民の理解を得る為の方策と指導も、責務的に取り組まなければならない。

本報告書は、これ等をふまえて発掘調査を実施した4件の遺跡について、発刊する発掘調査報告書であり、その遺跡の所在地と発見及び調査に至る経過等を次に記するものである。

1. 北水戸地下式墳

所在地・西都市大字上三財字北水戸6612-2番地

北水戸地下式墳は、後記にも申し述べてあるが、西都市域の南西端近くに位置し、同遺跡

の南 500 m には三財川が西方より東方に向かって流れ三財平野を潤し、その間には、戸数27戸の門田集落があり、集落内には県道福王寺佐土原線が通っている。

また、同遺跡の所在地丘陵は、東方・西方・北方ともに水田で囲まれ、周辺地全域が九州山地より突出する全長5 軒程の、通称小豆野原台地に湾様に食入る水田地帯である。

その中央部に隆起し、南北に細長く400m、幅100m、最高12～3 mの丘陵上・東側面6.2mの位置に地下式墳が構築されていた。

この地域は、比較的平坦な水田地帯であるが、大部分が湿地帯であって通称牟田と呼ばれる農耕困難な土地である。その為か耕地整理・基盤整備も行われないうまま現在を迎えている地域であった。

以上のことから、区画も不整形で高低の差もひどく、排水路等も系統的な組織によるものでなかった事から、合理的な乾田化ができないまま、不自由ながらの稲作だけが営農されていた。

かかる事から、大がかりな三財川筋地区県営圃場整備事業による土地改良事業が実施されるにあたり、いち早くこの地域も工区に組み込まれ、昭和55年度完成工区として同地域の事業が開始された。

工程には、地域の中央部に孤立する丘陵地の削平工事が組み込まれ、この作業は、頂上部から除々に削平する作業である。

工事中、頂上よりおよそ5 m程削平された位置で、突然工事用ブルドーザーが落ち込み、経1 m余の穴が開き、内部に人骨が発見された。

工事関係者は、人骨供養に寺の住職を依頼し、門田集落墓地へ埋蔵する。この時の住職が人骨は古墳より出土かも知れないとの事で、西都市教育委員会に連絡を取る。

市教育委員会は、たまたま県教育委員会と合同して、指定古墳の現況調査を実施中であり来都中の県文化課小森達郎主任主事と、担当の緒方が現地に出向し昭和55年12月16日地下式墳である事を確認する。

発掘調査の実施については、地元民・業者等が事業のおくれ工期近しを理由に応じてもらえなかった。しかし小森主任主事の口添え協力もあって、12月20日までの調査期間で合意し記録保存の為の調査を西都市教育委員会が実施することとなった。

調査は、早急に同月17日から着手するが、前記の如くすでに遺跡内部の立入りがはげしく2個体の人骨及び土器類もすでに取り上げられていた。そこでこれらの遺物を聞き取りによって原状に復し、玄室内の排土作業から開始する。

玄室内部は、実測図の如く人体埋葬部が一段と高く構造され、南側に位置していた事から

天井部落盤による被害もなく、床面にはまた川石が敷石されていた。

その他の記録については、後記北水戸地下式墳発掘調査の報告によって詳細に論述したい。

2. 金倉上地下式墳

所在地 西都市大字上三財金倉上7503番地

金倉上地下式墳は、九州山地から東南東に5km程伸びている洪積層の台地で、通称小豆野原と称される畑地帯の南西端に発見された遺跡である。

その所在地から南方は、急な斜傾地となって三財平野につながり、さらに800m程の位置には、同じく九州山地より突出した元地原台地が南方に伸びている。

昭和55年12月に発見された前記の北水戸地下式墳からは、方位を北にして61度西方を差し1500mの位置に金倉上地下式墳が発見された。

発見の動機は、後記にも記されるが土地所有者、西都市大字上三財7505番地金子光義氏が地下式墳発見地を昭和57年12月29日に、大型耕転機により耕地作業中、南に隣接する山林(杉山)との境界溝整溝時、突然土地の陥没によって発見されたものである。

金子氏は、同遺跡の内部に人骨土器等の存在する事から、翌年御用始の1月4日西都市教育委員会へ連絡、同日担当の緒方が現地に出向し、地下式墳である事を確認する。

発掘調査は、緊急を要する事から1月10日より、日高、緒方で実施し記録保存の措置を講じているが、詳細については後記金倉上地下式墳の報告による事から重複を避けたい。なお同遺跡は、調査終了後埋め戻してその保存に関しても、地主の好意により現状を保護する事が約束されている。

また、出土した人骨については、鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座の小片丘彦教授に、調査・研究をお願い申し上げ、その研究資料も、後記金倉上地下式墳の項で報告している。

3. イ、寺原第1遺跡1号住居址

所在地 西都市大字三宅字寺原脇5175-61番地

ロ、上野遺跡1号

所在地 西都市大字穂北字上野4458-2番地

上記「イ」については、個人住宅建築に伴う事前調査。「ロ」についても、国営一ツ瀬川土地改良事業に起因する土地発掘の事前調査によって発見した遺跡であるが、後記の各項に詳細に記される事から、この項では、所在地のみを記載して他は後記の項に譲りたい。

北水戸地下式墳

北水戸地下式墳

1. 位置と環境

西都市下三財門田地区に隣接した独立丘陵を削平して、農耕地とするための三財川筋土地改良事業施行に伴い、三財土地改良区から地下式墳発見による報告と発掘調査の要請があり昭和55年12月17日から20日まで日高正晴と緒方吉信がこの調査を担当した。

ところで、この地下式墳が発見された北水戸は県道高鍋高岡線が三財の岩崎で分れて、西の方福王寺へ向って約2 km行った門田集落の直ぐ北側に見える丘陵地帯である。

この地域は前述した小豆野台地を下った所にあたり、そして、その南側には一ツ瀬川の上流になる三財川が流れている。

この地域には高塚古墳も、ほとんど見当たらないが、この門田から南西へ川を越えて約1 km進むと六野原台地に達する。この台地の西の方では、昭和45年1月元地原地下式墳が発見され、また東側吹山、桃木畑地区では昭和17年に多数の地下式墳が発掘調査された。

いずれにしてもこの一帯は古代交通路の要衝にあたっており、西都原古墳群から南行すると三納古墳群、そして地下式墳の発見された前原、亀塚の三財古墳群、さらにこの路線は北水戸付近を通過し、六野原台地へと通じていたようである。

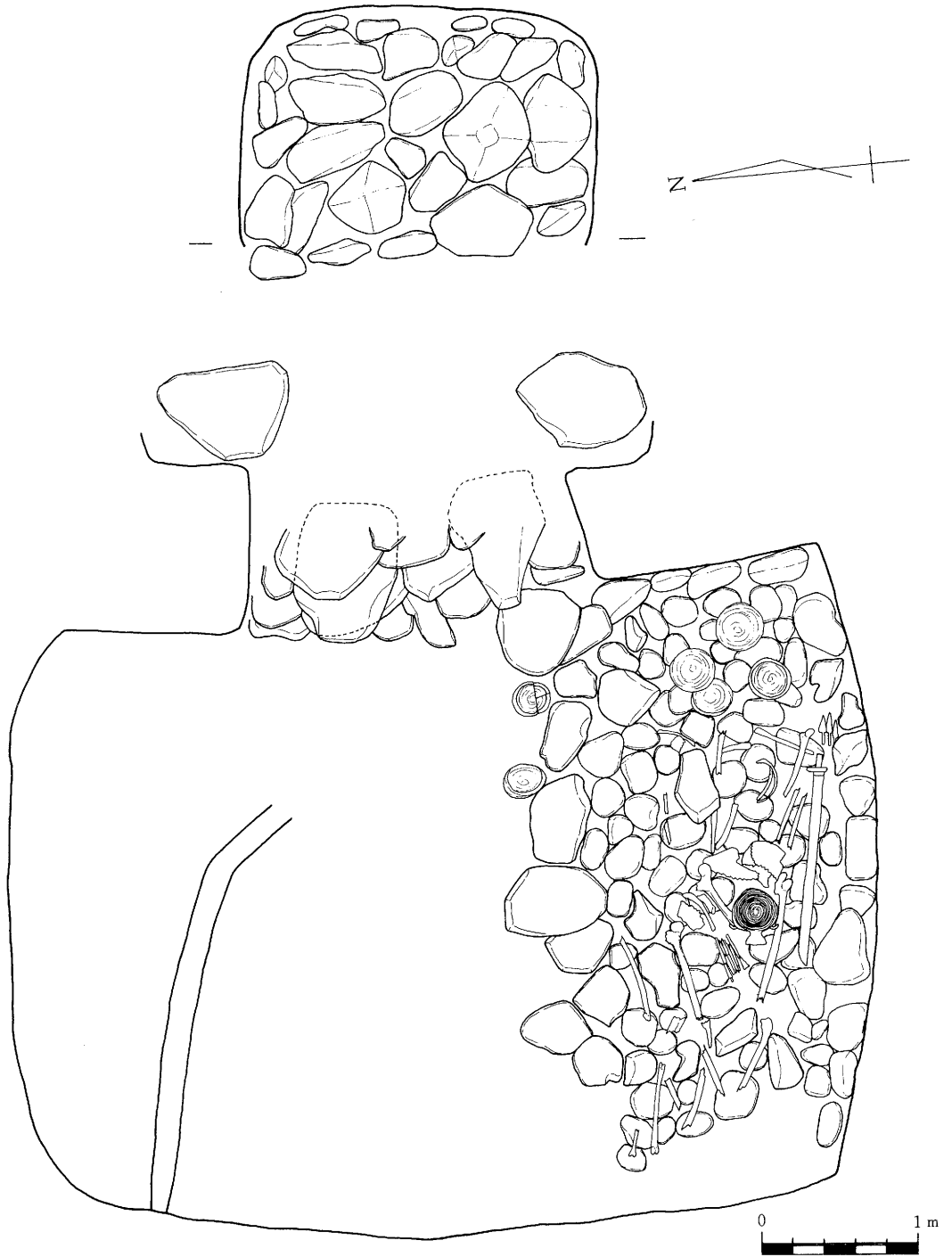
2. 内部遺構

この地下式墳は北水戸の小独立丘陵上に構築されていたが、地表面からは6.2 mの東面する傾斜地の中腹に位置していた。この一帯の地下式墳が、すべて洪積層の丘陵台地上に立地していることから考察すると、このように平地に存在する丘陵上の構築ということは十分に理解できる。

ところで、この内部構造であるが玄室は主軸線に対して直角の矩形状を呈し、その長軸の方に羨道が開口している平入型の地下式墳である。中軸線の方向は北92° 東となっている。

この玄室の形態であるが、奥壁側北隅だけは丸くなっているけれども、ほかの3ヶ所の隅は角張っている。それから玄室床面には南側のみに敷石が納置されており、しかもこの敷石は南側壁から約1.2 m（中央部で）の地点を南北に20cm～30cm大の丸石が並べられ、屍床として床面を区分していた。それでこの玄室内南側床面上の長方形敷石遺構が主体部としての屍床とみなされるわけである。

この玄室の奥行は中央部で2.2 m、横幅2.76 m、高さは天井部が崩壊しているので明かでない。



第1図 北水戸地下式墳実測図

い。なお玄室内北側床面上に幅9cmの溝状遺構が確認できたが、これがどのような目的で掘り込まれたのか、排水溝とみなした場合、地中における溝がどれだけの役割を果たすことができるか、さらに検討してみる必要がある。

それから被葬者は前述の敷石屍床の上に埋葬されており、副葬品もその周囲に納置されていた。そして、羨道部は玄室との境を丸い自然石で全面に開塞されていた。この羨道部を測定してみたところでは長さ（中央部）5.5m、横幅1.06m、それに高さ75cmとなっていた。

竪穴部は調査することはできなかったが、羨道に接触する部分に4ヶの自然石が納置されていたのが確認できた。

3. 出土遺物

玄室より武具をはじめとして計21点が出土している。内訳は武具（直刀1、鉄鏃14）、須恵器（蓋杯1、杯2、提瓶1）、土師器（蓋杯2、碗1）である。

武 具

直 刀（第2図 1）

玄室南側に副葬されていたものである。現存長69.7cm、刀身63cm、身幅は切羽寄りで3.8cm、中央部で3.2cm、峰部の厚さ0.5～0.7cmである。柄部の茎は現存長6.7cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmで、鏝元から2.7cmの所に目釘穴があり、目釘が残存している。また、柄の木質が付着している。

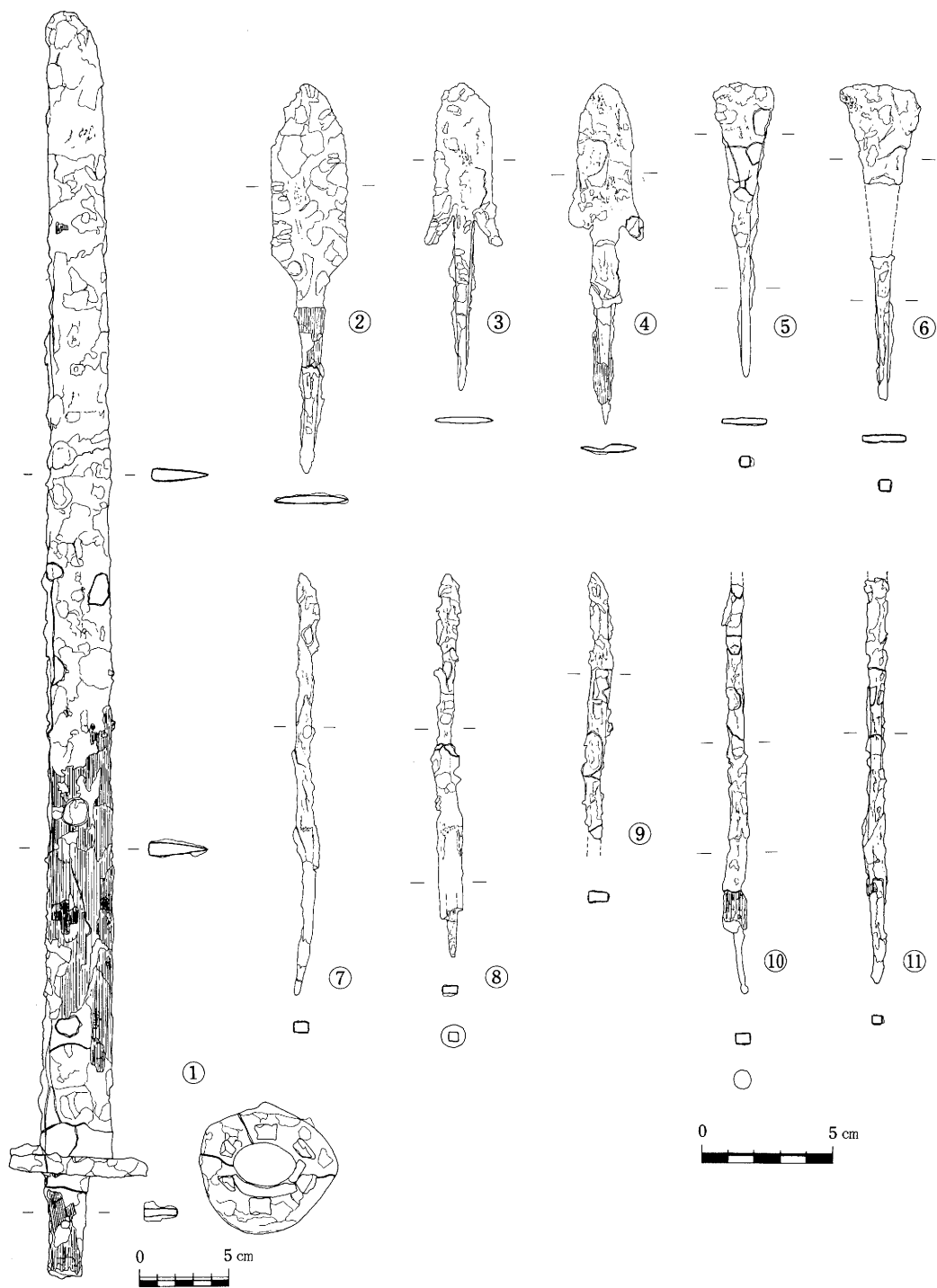
鏝は7.5×7cmの倒卵型で、長方形の透しが6ヶ所に施されている

刀身は反りが見られず平造りで、鞘の木質が部分的に付着している。

なお、県内でも鏝が完全に残っているのは珍らしく注目される資料である。

鉄 鏃（第2図 2～11）

2・3・4・5・6・とも有茎平根鏃である。2は逆棘のない柳葉式で、全長15.2cm、身幅2.9cm、厚さ0.4cmの完形である。3・4は脇袂長三角形式で3は全長12cm、身幅2.2cm、厚さ0.3cm、4は全長13.3cm、身幅2.2cm、厚さ0.3cm、3は完形であるが、4は脇袂部の片側が欠損している。5・6はノミ頭式で、5は全長11.5cm、先端部幅2.3cm、厚さ0.3cm、6は中間部分が欠損しているため全長は不明、先端部幅3cm、厚さ0.3cmである。7・8・9・10・11は有茎細根鏃である。その他4点を加え計9点出土しているが、刀型3点、不明6点（完形に近いもの2点）である。7は全長16.5cm、身幅0.6cm、厚さ0.4cm、8は全長14.9cm、身幅0.5cm、厚さ0.4cm、9は現存長10.5cm、身幅0.8cm、厚さ0.4cm、10は現存長16.0cm、身幅0.6cm、厚さ0.5cm、11は現存長15.8cm、身幅0.5cm、厚さ0.3cmで、その他4点は数cm程の



第2図 北水戸地下式墳出土遺物 ① 直刀 ②~⑪ 鉄鏃

残欠片である。

須恵器

蓋杯 (第3図 12)

12は口径13.8cm、器高3.8cm、口縁部付近で掘曲しゆるい稜をつくる。口縁部は比較的厚く、天井部に至ってしだいに厚くなっている。内外面ともヨコナデ調整であるが、外面の方が粗い。胎土には2mm前後の粒子を含み、焼成は良好である。

内面には朱が少量ではあるが付着している。

杯 (第3図 13. 14)

13は口径12.1cm、器高4.4cm。立ちあがりは低く、内傾度も大きい。口縁部は薄く、胴体部で少し厚くなり、底部まで同じ厚さで続いている。口縁部、胴体部は内外面ともヨコナデ調整で、底部外面はあらいヨコナデ調整、内面はたて方向のナデ調整である。胎土には2mm前後の粒子を含み、焼成は良好である。

14は口径12.1cm、器高4.6cm、立ちあがりは比較的高く、内傾度も13より小さい。受け部は立ちあがりとの境に沈線をめぐらしている。口縁部は薄く端部は尖っている。胴体部も比較的薄く、底部にかけてしだいに厚くなっている。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、底部はヘラ削りである。胴体部の外面は粗い、内面は丁寧なヨコナデ調整である。胴土に2mm前後の粒子を含み、焼成は良好である。

提瓶 (第3図 15)

15は口径7.4cm、器高18.1cm。ラッパ状の口縁部を呈し、端部は平坦である。胴部は前面は大きく膨み、背面は平らで、側面肩部に鉤手状の把手を両側にもつ。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、胴部は側面を除いて、すべてカキ目調整を施している。

土師器・蓋杯 (第3図 16. 17)

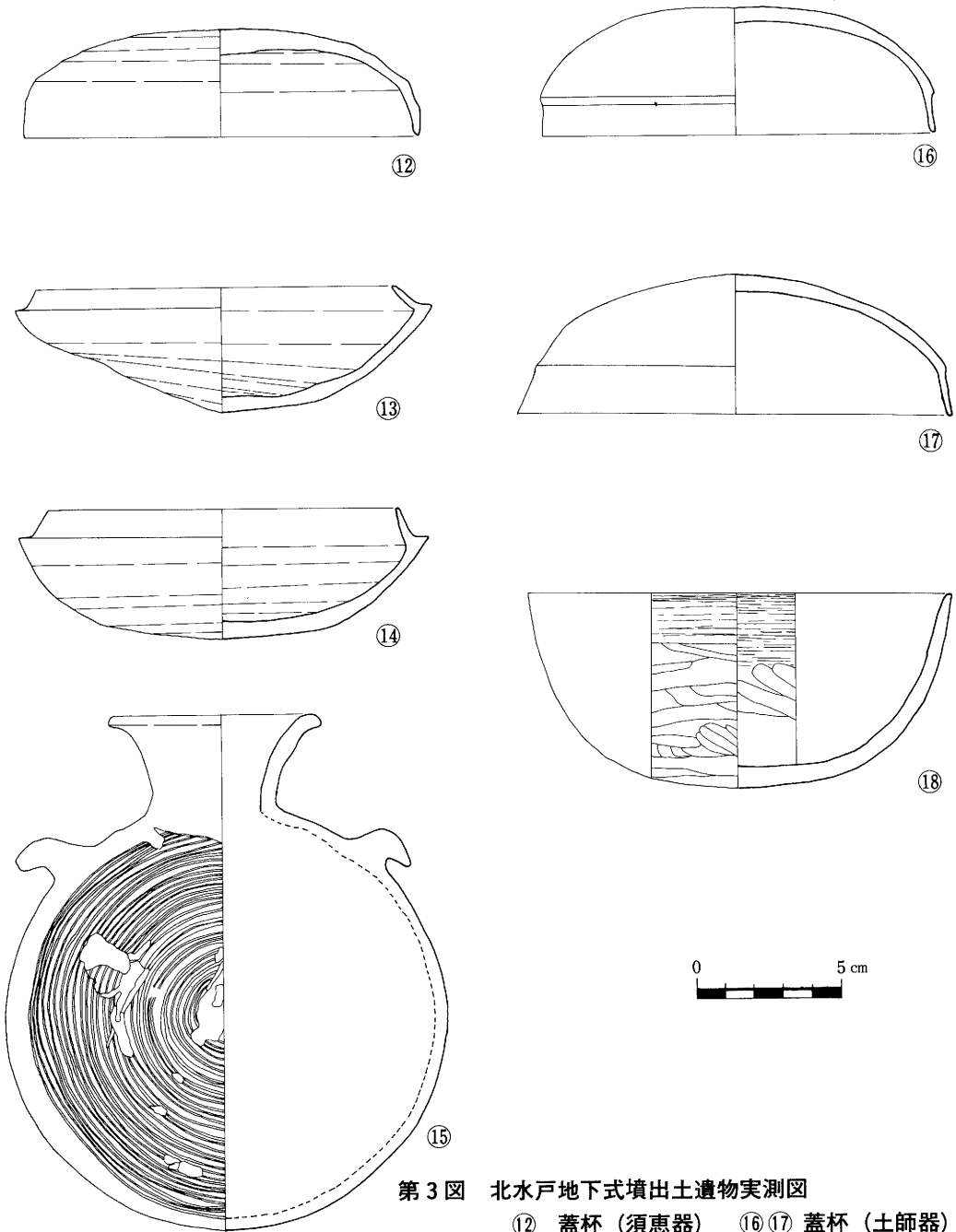
16は口径13.7cm、器高4.5cm、天井部と口縁部は薄く、天井部に至ってわずかに厚くなっている。内外面ともナデ調整後ヘラ磨きをしているが、内外面とも面積の3分の2程度が風化している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

17は口径15.2cm、器高5.0cm。天井部と口縁部の境には沈線はなく、ゆるい稜をつくる。口縁部は外反しており薄い。天井部に至ってわずかに厚くなっている。内外面ともナデ調整後ヘラ磨きをしているが外面天井部はあらい。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

碗 (第3図 18)

18は口径14.7cm、器高6.9cm、丸底の底部で胴部は直線的に開き口縁部に至る。口縁部は内外面ヨコナデ調整、その他は内外面ともナデ調整後ヘラ磨きをしているが、17と同様外面

は粗い。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。



第3図 北水戸地下式墳出土遺物実測図

- ①② 蓋杯 (須恵器) ①⑥①⑦ 蓋杯 (土師器)
- ①③①④ 杯 (須恵器) ①⑧ 碗 (土師器)
- ①⑤ 提瓶 (須恵器)

4. まとめ

以上、北水戸地下式墳について考察してきたが、この矩形型玄室の平入式地下式墳は西都原古代文化圏内の地域では数多く発見される形態である。

次に述べる金倉上地下式墳も同一形式に包含される。ところで、この地下式墳の内部主体は玄室内部の南側に寄せられており、一般的にみられる玄室床面敷石が敷き詰めてあるのと異っている。この内部形態は諸県地域により多く散見できるが、東諸県郡国富町と隣接している西都市の元地原地下式墳の中にも、この北水戸形式の地下式墳が数基確認できた。

また興味深いことは後述する金倉上地下式墳の玄室も四隅の奥壁側の一方だけが角張らずに丸みをおびていることである。そして、これに西都原地下式3号墳の玄室形態を比較してみると、西都原地下式3号墳から北水戸地下式墳、そして金倉上地下式墳へと形態が変化していったことが了解できる。

もちろん時期的にはわずかの差しかないけれどもそのことは、出土した須恵器の杯口縁部の立ち上りにおいても、この北水戸地下式墳は西都原地下式3号墳に次ぐ時期である。

それで地下式墳の編年では第Ⅱ様式B類に比定したいが、金倉上地下式墳よりも先行する時期と推測され、年代的には6世紀後半頃を想定したい。

註

1. 日高正晴「日向の古墳と西都原古代文化圏」『西都原古墳研究所年報』創刊号、昭59.3
2. 日高正晴「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』43巻4. 昭33.3.
3. 日高正晴「宮崎県桃木畑地下式A号墳」『古代学研究』64. 1972.

金倉上地下式墳

金倉上地下式墳

1. はじめに

西都市上三財の金子光義氏から連絡があり、金倉上の小豆野原台地南側で昭和57年12月29日同氏所有の畑地を大型耕転機にて開掘中、隣接地との境界になる掘り込まれた溝がその機械の振動により、突然地下陥没して内部に遺物らしきものが散見できるということであった。

それで昭和58年1月1日西都市教育委員会に発足したばかりの西都原古墳研究所が第1号として担当することになり、日高正晴と緒方吉信が1月10日から17日まで発掘調査を行った。

2. 位置と環境

この地下式墳が発見された上三財小豆野原台地は、特別史跡西都原古墳群の南西約6.5kmの所にあり、三財の中心街、岩崎からは直ぐ西の方の台地上って約3.5km行った断丘寄りの地点に位置している。

また、ここから南の方約3kmの六野原台地では昭和17年末、陸軍の飛行場建設のため27基の地下式墳が発掘調査された。

さらにこの六野原台地から南へ約3km進むと、本庄の大古墳群が展開している。総数57基うち前方後円墳が17基も存在する。

それからこの遺跡から東の方へ約4kmの、一段と高い丘陵は中世日向を制圧した伊東氏の本城であった都於郡城跡である。

ところでこの小豆野原台地上東縁地域の亀塚、前原一帯には台帳で85基、現存52基の三財古墳群が群在する。

また、この地下式墳のすぐ北の方約300mの地点には国指定の常心塚古墳がある。この墳墓は一辺の長さ約24mの方形墳であり、しかも周囲に土堤をめぐらしていることで全国的にも極めて珍しい古墳である。

しかも、三財古墳群の西の方に一基だけ離れ、孤立して築造されていることは極めて注目される場所である。

この常心塚と同一形式の墳墓としては奈良県明日香の石舞台古墳がある。石舞台の方が規模は大きいけれども、古く盗掘の憂きめにあっているのに反し、常心塚古墳は内部、外形ともに完全保存ができています。いずれにしても日本における双壁といえる。

なお、この金倉地域には県指定の高塚古墳が4基散在しており、また、この三財の丘陵台地上にはこれまで2、3ヶ所地下式墳が発見されたことがある。

3. 内部遺構

この地下式墳の内部は中軸線が北40° 東となっており、羨道が玄室の南西の方向に開口している平入式の様式をとっている。

そして玄室の形状は羨道部側の両隅がやや角張っているが、奥の両隅は全体的に丸味を呈している。それで形体的には奥行がわずかに狭いだけで矩形状の玄室から方形に移行した形式ともいえる。それから玄室の奥行（中央部）は1.7m、横幅（中央部）1.95m、それに高さは71cmとなっている。

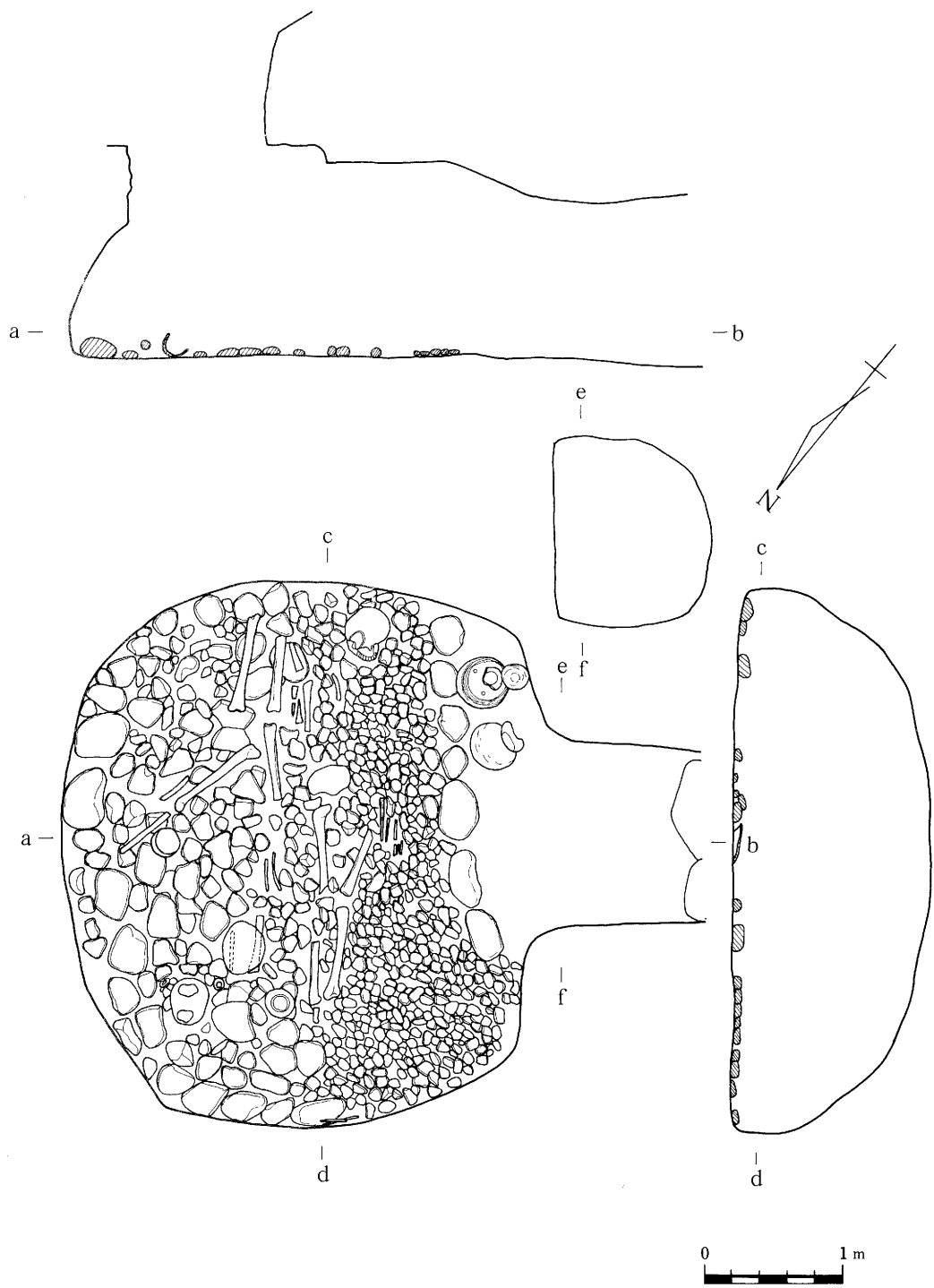
また羨道は長さ60cm、幅（中央部）59cm、そして高さ55cmであり、羨道部の入口は50cm～60cmの礫石で閉塞されていた。

また玄室の床面は全面大小の丸石で敷き詰められていたが、奥の方へゆく程比較的大きい礫石がみられ、手前には小石が空き間なく納められていた。

なお羨道部から少し玄室に入った所で、床面と敷き石を区切るため15cm～20cm程度の礫石が東西一直線に納置されてあった。この礫石内でも奥の方の大きな礫石が敷かれている部分が主体部とみられ、この部分に人骨片が2体納められてあった。

また副葬品も大体この敷き石上に納置されてあったが、さらにこの敷き石の外側にも土器が献納されていた。

そのほか玄室には特別な遺構は存在しないけれども、その内部両側壁面には農耕具様の鉄器で削平された痕跡が遺存していた。そして天井部はドーム形式となっていた。



第4図 金倉上地下式墳実測図

4. 出土遺物

遺物は鉄器などを含め計20点が出土している。内訳は鉄器（刀子1、鉄鏃12）、須恵器（壺1、埴1、平瓶1）、土師器（碗1、蓋1）、装飾品（銀環2）である。

鉄器

刀子（第5図 1）

1は玄室中央部に副葬されていたもので、現存長16.3cm、刀身7.4cm、刀身中央部幅1.1cm、峰部の厚さ0.7cm、刀身にはほとんど反りはみられない。柄部は良く遺存しており、柄元から柄頭にかけて径2cmの鹿角製の丸柄を装着している。柄元には銅製のビル輪が遺存している。

鉄鏃（第5図 2～6）

2、3とも有茎平根ノミ頭式の鉄鏃である。2は全長10.2cm、先端部幅2.4cm、厚さ0.4cm、3は全長8.4cm、先端部幅2.7cm、厚さ0.3cmである。

4～6は細根鏃である。4は現存長8.4cm、身幅0.4cm、厚さ0.3cm、5は現存長6.5cm、身幅0.4cm、厚さ0.3cm、6は現存長7.7cm、身幅0.4cm、厚さ0.3cmである。細根鏃はこれらの他7点を加え10点出土しているが、いずれも残欠片である。

須恵器

壺（第6図 7）

7は口径13.6cm、器高20.0cm。口縁部は「く」字形に外反し、端部は少し平坦になっている。また、口縁直下には一条の浅い沈線をめぐらし、その沈線のすぐ下には段を設けている。頸は縮り、胴部中央より少し上で最も脹らみ、丸底の底部を有している。内外面ヨコナデ調整、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。

埴（第6図 8）

8は口径8.2cm、器高5.1cm。口縁部は極端に短く、口唇部は平坦である。胴部は逆「く」字形で中央部で最も脹らみ底部に至っている。口縁部から頸部にかけては厚みをもち、胴部最大径で少し薄くなり、底部にかけてはだいに厚くなっている。内外面ヨコナデ調整であるが、外面胴部下半分から底部にかけては粗い。胎土に2mm前後の粒子を含み、焼成は良好である。

平瓶（第6図 9）

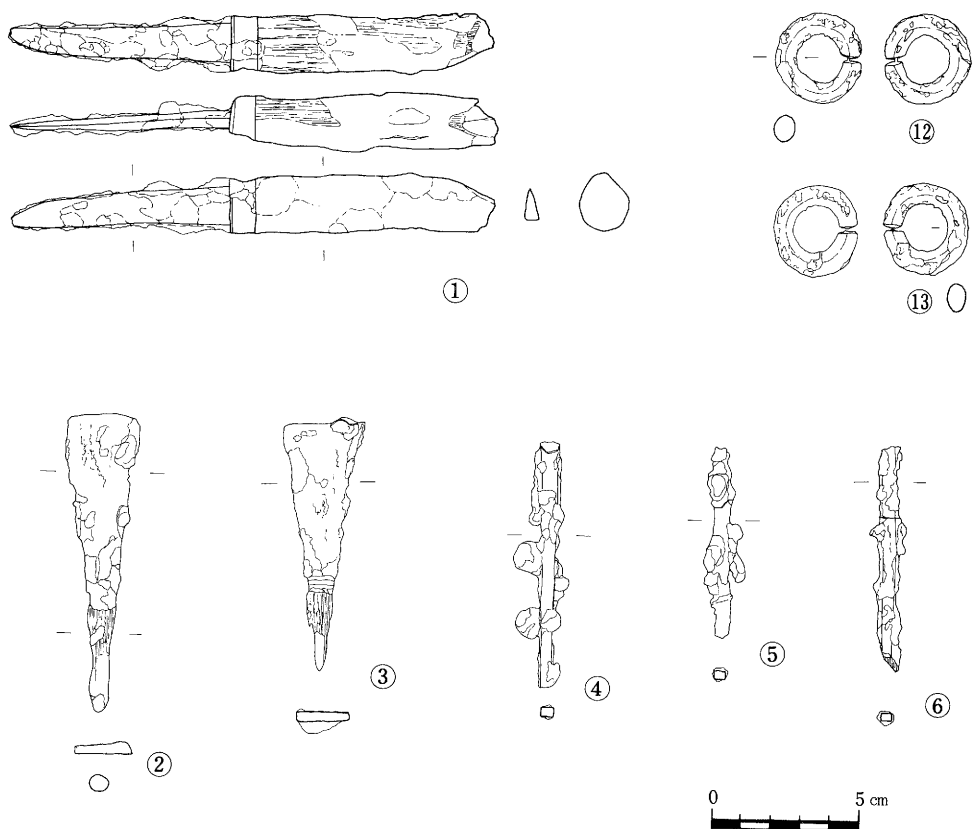
9は口径6.3cm、器高17.7cm。内外面部分的に自然釉がかかっている。口縁部はわずかに外反しながら立ちあがり、途中中央部付近から垂直に立ちあがる。胴上部は平坦で、胴部中央部で最も脹らみ、平底の底部へ至っている。また胴上部にはボタン状のつまみ（円形浮文）

か2個ついている。口縁部・頸部付近・胴部下部はヨコナデ調整で、その他はカキ目調整である。内面はヨコナデ調整、胎土に2mm前後の粒子を多量に含み、焼成は良好である。

土師器

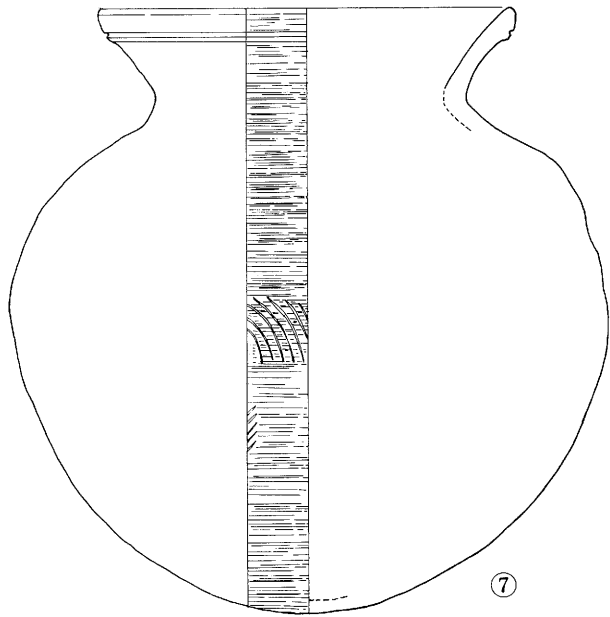
碗 (第6図 10)

10は口径12.1cm、器高6.5cm。平底の底部から内湾しながらなだらかに立ちあがり口縁に至っている。口縁部は薄く、底部にかけてしだいに厚くなっている。底部はヘラ削り、胴部口縁部及び内面はヘラ磨き調整である。胎土に砂粒と白雲母を多量に含み、焼成は良好である。

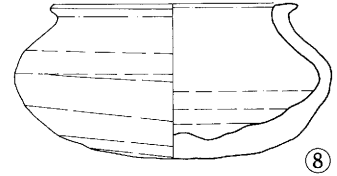


第5図 金倉上地下式墳出土遺物実測図

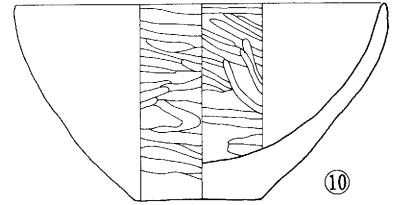
① 刀子 ②～⑥ 鉄鍬 ⑫ ⑬ 銀環



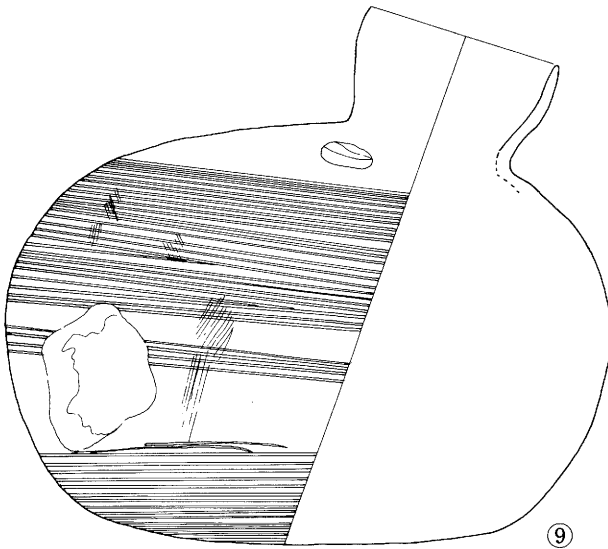
⑦



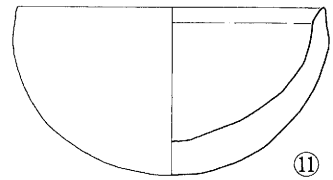
⑧



⑩



⑨



⑪



第 6 图 金倉上地下式墳出土遺物実測図

⑦ 壺 ⑧ 钵 ⑨ 平瓶

⑩ 碗 ⑪ 盃

盥 (第6図 11)

11は口径10.1cm、器高5.6cm。丸底の底部から円状に内湾しながら立ち上がり口縁部に至っている。口縁部内側には稜をもっている。口縁部はわりと厚く、底部にかけてしだいに厚くなっている。内外面ともヘラ磨き調整である。胎土に砂粒と白雲母を多量に含み、焼成は良好である。

装飾品

銀環 (第5図 12、13)

両方とも玄室左奥、頭骸骨の近くから出土したものである。12、13とも直径3.1cmの円形状で、断面は楕円形をしている。銅芯に銀張りをしているものと思え、部分的に銀が残っている。

5. まとめ

以上、金倉上地下式墳の内部遺構および出土遺物について論述してきたが、日向地方の地下式墳において、玄室内部に土器類が副葬品として埋葬されるようになるのは、内部構造が平入りとなり、床面には敷石が敷かれるようになる玄室の時期からである。

この金倉上の地下式墳においても全面に扁平な丸石が納置されていたが、この形式に類似した地下式墳としては西都原地下式^①3号墳、同じく東立野地下式^②墳、それに国富町祝子園地下式^③墳などがあげられる。

前の項で記述した西都市北水戸地下式^④墳も同じく三財地区にあって、この金倉上地下式墳と深い関連を有している。

次にこの地下式墳の年代的考察について述べてみたいと思う。地下式墳の編年的分類に関しては、かつて論述したことがあるが、地下式墳時代を大きく3様式に類別した。この中では、この金倉上地下式墳は第2様式B類に比定されると思う。

第2様式は長方形の玄室の長軸の方に羨道が開く平入式の内部構造を有する地下式墳であり、玄室の四隅も角張り、その床面には全面に扁平な丸石が敷かれてある。そして副葬品も土器類が主体部に納置されるようになる。

その典型的な地下式墳として西都原地下式3号墳をあげることができる。そしてこの時期のものは内部遺構も比較的大きく長軸の長さが2.6mもある。

また出土の須恵器もⅢ様式の前半頃に相応する。

ところでこの金倉上地下式墳は玄室の四隅のうち奥壁側の南側隅は完全に円形状を呈するようになり、他の3ヶ所の角隅も辛うじて角部の片鱗をわずかに残しているだけで、全体的

には楕円形に移行すべく変化を来した内部形態をとっている。

そして出土遺物からの考察からでも、西都原地下式3号墳よりも時期的に下と考えられる。それで第Ⅱ様式B類の中にも多少前後の時期があるようであり、この金倉上地下式墳はⅡ-Bでもその後半に想定されると思う。

年代的には西都原地下式3号墳を6世紀の中頃に比定するとすれば、この金倉上地下式墳は末期にかけての時期と推測される。須恵器の編年分類ではⅢ様式末頃に相当するようである。

そのように分類すると地下式墳編年の第Ⅲ様式とほとんど接触することになるが、西都原地下式2号墳の須恵器分類はⅣ様式に類別されている。いずれにしても編年分類の第Ⅱ様式B類後半と第Ⅲ様式初頭とはある部面では重なり会うかもしれない。

しかし、玄室の内部構造および副葬品などを総合的に考察した場合は、西都原東立野地下式9号墳なども第Ⅱ様式B類に類別した方がよいと思う。

また第Ⅲ様式は第Ⅱ様式の内部構造がさらに退化した形態で楕円形状を呈し、内部構造も小規模になり、敷石など内部施設が姿を消し簡易化されてくる。

この時期の地下式墳は遺物も少いので十分な報告例もないが、今後も発見される可能性があるので第Ⅱ様式とは明確に類別した方がよいと思う。

註

1. 日高正晴「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』43巻4. 昭33.3.
2. 日高正晴・茂山 護「東立野地下式9号墳」『宮崎考古』1号. 昭50.6.
3. 岩永哲夫・田ノ上哲「祝子園地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』21集. 昭54.3
4. 本古墳研究所の「文化財調査報告書」1号に掲載、昭60.3
5. 日高正晴 前掲書①
6. 福尾正彦「日向中央部における地下式横穴とその社会」『古文化談叢』7集. 1980.4.

6. 金倉上地下式墳出土の人骨

小片丘彦・川路則友
(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座)

はじめに

宮崎県中部以南および鹿児島県大隅地方に分布する地下式墳は南九州独特の埋葬施設で、

「隼人」との関連において興味をもたれている。被葬者についてはこれまで多くの報告がなされ、その形質は強い短頭性と低・広顔傾向を示し、大腿骨粗線の発達は良好であるが柱状形成は見られず、身長は男 161 cm、女 153 cm 程度という結果が得られている（内藤・松下、1976）。しかし最近の資料ではこれらの形質にも例外が認められ、地域差の存在が示唆されてきている（松下、1981 a、b、1982；松下・野田、1983；松下ら 1983）。今回、宮崎県西都市三財金倉上地下式墳から 1983 年 1 月に発見された 3 体合葬の人骨について検討したので、地下式墳人の形質に関する追加資料として報告する。調査の機会を与えて下さった西都原古墳研究所日高正晴所長をはじめ三輪公洋事務局長、緒方吉信主事に深く感謝する次第である。資料 3 体は、壮年女性（第 1 号）若年女性（第 2 号）および性別不明の小児（第 3 号）である。葬位は、第 1 号は北西頭位伸展葬、第 2 号は南東頭位伸展葬であり、第 3 号については不明である（図 7）計測方法は主に Martin—Saller（1957）に従い、一部 Howells（1973）によった。

所 見

1. 第 1 号人骨（女性・壮年）

顔面部を欠損する頭蓋および遊離した口蓋部、下顎底不完全な下顎骨、環椎片と頸椎 2 個、右鎖骨片および右肩甲骨の一部、骨頭を欠く左大腿骨、右大腿骨下半および下端を欠く左脛骨、腐蝕の著しい右脛骨体からなる(写真 $\frac{1}{3}A$)。比較的小型の頭蓋で、眉弓は突出せず、乳様突起は小型で内下方に下垂し、外後頭隆起は発達していない。主要縫合の閉鎖は内板だけにわずかに見られ、歯の咬耗はマルチンの第 2 度を示す。四肢骨の関節は小さい。以上のことから、この個体は壮年の女性と思われる。

(1) 頭 蓋

計測値を表 1 に示した。顔面頭蓋が欠損しているので計測は脳頭蓋に限られるが、頭型は中頭・中頭・中頭型（長幅示数 76.1、長高示数 71.6、幅高示数 94.0）を示す。口蓋部は頭蓋から遊離しているが、齒槽突起が破損し上顎歯を欠いている。下顎骨は頑強であるが下顎角の張り出しは少ない。下顎に植立する歯は次の通りである。

■ ● 6 5 4 ○ 2 1	1 2 3 4 5 6 ● 8
-----------------	-----------------

○：死後脱落 齒槽開放
 ●：生前脱落 齒槽閉鎖
 ■：齒槽とともに欠損

下顎歯の咬耗は左智歯を除きマルチンの第2度を示す。左智歯は同第1度である。左右第1小白歯の歯頸部に強度の齶蝕が認められる。左第2大臼歯は生前脱落し歯槽は完全に閉鎖しており、後続の智歯は近心傾斜している。右第2・第3大臼歯部の歯槽は破損しているが、第1大臼歯の後ろに閉鎖した歯槽がわずかに残っているので、左側と同様右第2大臼歯も生前に脱落したものと考えられる。

その他の所見として、頭蓋冠の骨壁が厚く、前頭部で7-10mm、頭頂部で7-12mmを数えるほか、顕著な後頭隆起が見られる(写真4E)。また左右外耳道の前後壁に外耳道骨瘤が認められる(写真4AB)

(2) 四肢骨

上肢骨は残っていない。左右大腿骨および左右脛骨は残っているが、いずれも不完全である。計測できた項目については表2に、横断面については図8に示した。大腿骨では骨体上部に弱い扁平性が見られる(上骨体断面示数81.5)ほか、粗線の発達もよく、柱状形成の傾向が認められる。脛骨に扁平性は認められない(脛示数左75.4)。

2. 第2号人骨(女性・若年)

前頭鱗左半などを欠く頭蓋、左右下顎枝の不完全な下顎骨、右寛骨臼部、下端を欠く右大腿骨、左大腿骨体、右脛骨下半、左脛骨体、左腓骨片、左距骨、左右踵骨および右第3・第4中足骨からなる(写真 $\frac{2}{3}$ B)。比較的小型の頭蓋で、各筋付着部は粗雑でなく、乳様突起は小さく、眉弓、外後頭隆起ともに突出はわずかである。主要縫合は内・外板ともに閉鎖していない。智歯が未萌出であること、歯の咬耗はマルチンの第1度を示すものが多いこと、大腿骨、脛骨の骨端が癒合途上にあることから、この個体は若年(17、8歳)の女性と思われる。

(1) 頭蓋

計測値を表1に示した。頭型は短頭・高頭・中頭型(長幅示数81.9、長高示数76.0、幅高示数92.9)である。顔面頭蓋は、中顔型(コルマン氏顔示数87.1)かつ広鼻型(鼻示数52.0)である。植立する歯は次の通りである。

△ 7 6 5 ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ 4 5 6 7 △
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8

(△：未萌出)

上顎骨歯槽突起が一部破損しているので前歯を中心に7歯が失われているが、残存歯の咬耗は、ほとんどがマルチンの第1度を示している。齶蝕は見られない。左右上顎智歯は歯槽骨中に埋伏しており、下顎智歯は左右とも萌出途上である。左右とも外耳道後壁に外耳道骨

瘤が見られる。(写真 4CD)

(2) 四肢骨

上肢骨は残っていない。左右の大腿骨と脛骨は存在するがいずれも不完全で最大長を計測できるものはない。大腿骨頭および脛骨下端は癒合完了直後で明瞭な骨端線が見られる。大転子は癒合未完了である。大腿骨と脛骨の計測値を表 2 に横断形を図 8 に示す。大腿骨体上部は弱い扁平性を示す(上骨体断面示数 83.9)。粗線の発達が良く、強い柱状形成が見られる(骨体中央断面示数左 120.9、右 123.3)。脛骨は厚脛(脛示数 75.8)である。

3. 第 3 号人骨

不完全な左右大腿骨と左脛骨の一部が出土しただけである。形態や大きさから小児骨と推定されるが性別は不詳である。

4. 特記所見

その他の所見として、第 2 号人骨の頭蓋腔内から土壌とともにほぼ完全なアカネズミ *Apodemus speciosus* 1 体分の骨格が発見された(写真 4F)。アカネズミは古くは縄文時代後期の遺跡から発見されているが、人間との関わりについてはまだ不明な点が多いという(金子、1983)。平地から低山帯にかけて住み、地下のトンネルに巣を作るアカネズミの生活形態から判断すると、深さ約 1 m の地下式墳内にはルートがあれば容易に侵入できたと思われるが、この頭蓋が営巣地もしくはネグラとして利用されていたかどうかについては正確にはわからない。また侵入時期についても不明である。

考 察

宮崎県下の地下式墳から出土した人骨については、灰塚(内藤、1973)、大萩(内藤、1974)、日守(松下、1981 a)、上の原(松下、1981 b)、旭台(松下・野田、1983)などの報告があるが、今回はこれらの人骨を一括して平均値を算出した値(松下、ら、1983)を「地下式墳人」の平均値として金倉上人骨との比較に用いた(表 3)。脳頭蓋においては金倉上第 1 号人骨は、他の地下式墳人と頭蓋最大長で類似するが最大幅およびバジオン・プレグマ高は小さく、地下式墳人が一般に短頭・中頭型であるのに対し、やや長頭に近い中頭型および低頭に近い中頭型を示す。第 2 号人骨では他の地下式墳人より頭蓋最大長だけが小さく、最大幅およびバジオン・プレグマ高はほぼ一致する。従って第 2 号人骨は顕著な短頭・高頭型を示し、これも地下式墳人一般とは幾分異なっている。顔面頭蓋では、第 2 号人骨の頬骨弓幅は地下式墳人より小さいが、顔高が大きいので、コルマン氏顔示数においては地下式墳人の広顔型に対し、金倉上第 2 号人骨では中顔型を示している。すなわち第 2 号人骨の頭蓋に関しては、地

下式墳人一般に類似するよりも、むしろ地域の遠く隔たった畿内古墳人（島・寺門、1957）に似るという結果となる（表3）が、乏しい資料で畿内古墳人との関連性を論ずることは当然不適切である。

以上のことから、金倉上人骨は少なくともこれまで報告されてきた地下式墳人一般とはやや異なる形質を有し、南九州の地下式墳人自体が変異に富むものであることを示しているように思われる。つまり、強い短頭・低顔傾向を示す（内藤ら、1976）地下式墳人の形質にも多少の例外があるとする松下ら（1983）の調査結果を裏付けるものであるといえよう。

四肢骨については、地下式墳人の女性大腿骨にはこれまで柱状形成がほとんど認められないとされていたのに対し、金倉上人骨には第1・2号とも柱状形成が見られる。その他の形質は、これまで報告されている地下式墳人に類似し、大腿骨体上部の扁平性は弱く、脛骨には扁平性は認められない。

総 括

1. 宮崎県西都市三財金倉上地下式墳から、壮年女性（第1号）、若年女性（第2号）および小児（第3号）の3体合葬人骨が出土した。
2. 頭蓋については、第1号が中頭・中頭・中頭型、第2号が短頭・高頭・中頭型、中顔・広鼻型を示し、第1・2号人骨ともこれまで報告されている地下式墳人一般の形質とやや異なっている。
3. 第1・2号とも左右外耳道に外耳道骨瘤が見られるほか、第1号の後頭部には強い後頭隆起が認められる。
4. 四肢骨については、第1・2号とも大腿骨に柱状形成が見られるほか、大腿骨体上部は軽度に扁平である。脛骨には扁平性は認められない。
5. 第2号の頭蓋腔内からアカネズミの骨格1体分が発見された。

参 考 文 献

- Howells, W. W. (1973) Cranial Variation in man. Papers of peabody Museum of Arch-aeol. and Ethnol. Harvard Univ. 67
- 金子浩昌 (1983) ネズミと石器時代の食物貯蔵穴、動物と自然 13 (14) :12-15
- 松下孝幸 (1981 a) 日守地下式古墳出土の人骨. 宮崎県文化財調査報告書 第23集 : 169-178
- 松下孝幸 (1981 b) 宮崎県上の原地下式古墳出土の人骨. 宮崎県文化財調査報告書 第24集

: 114—133

松下孝幸・分部哲秋 (1982) 宮崎県国富町本庄28号地下式古墳出土の人骨. 宮崎考古

(8): 16—20

松下孝幸・野田耕一 (1983) 宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨. 宮崎県文化

財調査報告書 第26集: 78—107

松下孝幸・分部哲秋・石田肇 (1983) 宮崎県都城市菓子野地下式横穴出土の古墳時代人骨.

都城市文化財調査報告書 第3集: 105—145

Martin, R. & K. Saller (1957) Lehrbuch ber Anthropologie, Band 1. G. Fischer, St

-uttgart

内藤芳篤 (1973) 灰塚地下式横穴人骨. 灰塚遺跡: 72—77

内藤芳篤 (1974) 人骨とその埋葬方法. 大萩遺跡 (1): 55—62

内藤芳篤・松下孝幸 (1976) 南九州出土の古墳時代人骨. 解剖誌51: 279

島五郎・寺門之隆 (1957) 近畿地方古墳時代人頭骨について (略報). 人類誌66: 57—64

表1 頭蓋計測値(女性)

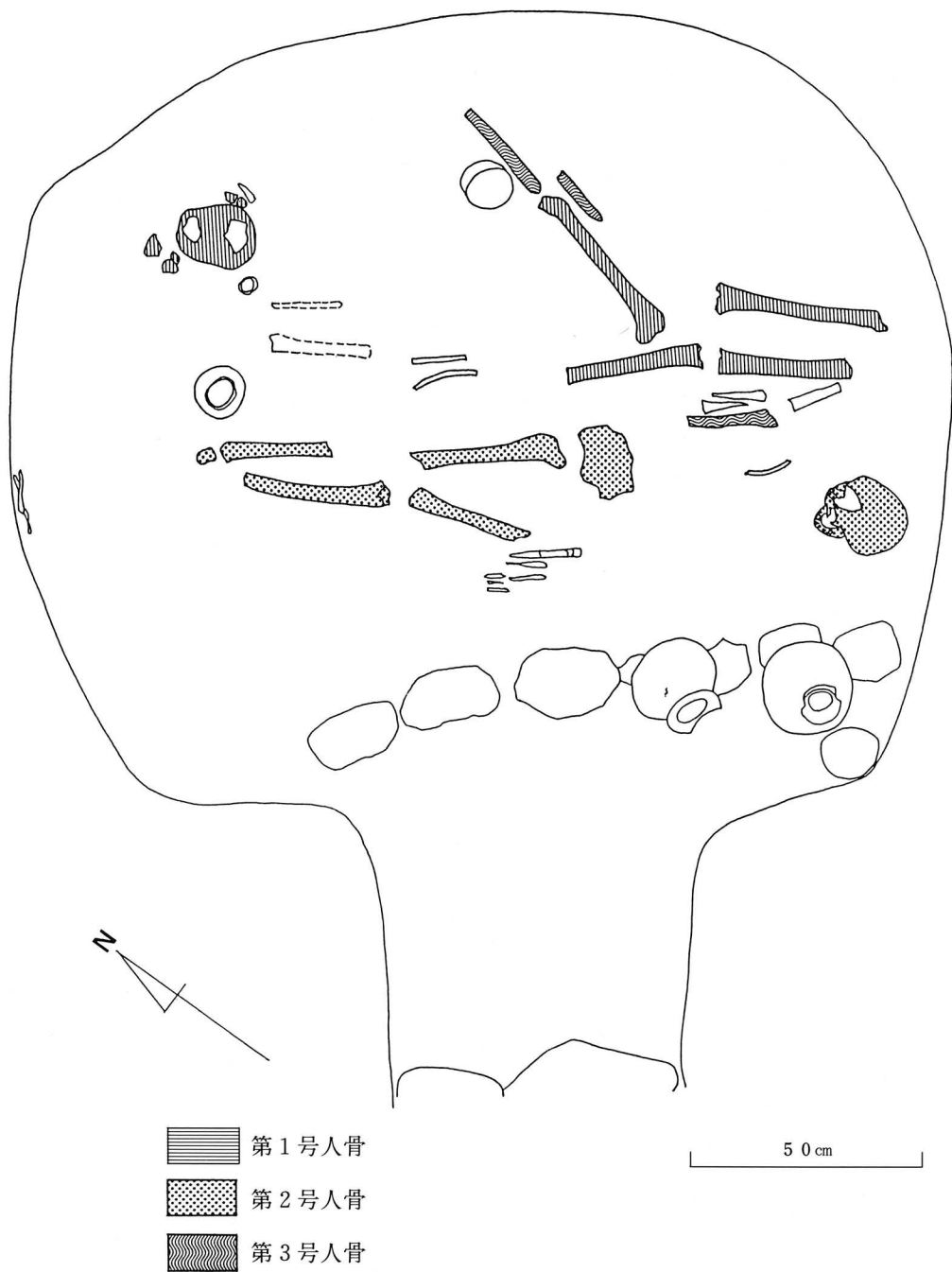
	第1号人骨	第2号人骨
1 頭蓋最大長	(176)	171
5 頭蓋基底長	--	94
8 頭蓋最大幅	134	140
9 最小前頭幅	--	(91)
11 両耳幅	120	125
17 Ba — Br 高	126	130
26 正中矢状前頭孤長	--	124
27 正中矢状頭頂孤長	117	131
28 正中矢状後頭孤長	--	104
29 正中矢状前頭弦長	--	109
30 正中矢状頭頂弦長	106	113
31 正中矢状後頭弦長	--	88
45 頬骨弓幅	--	132
47 顔高	--	115
51 眼窩幅 I	--	40
54 鼻幅	--	26
55 鼻高	--	50
Vertex Rab.	120	122
Nasion Rad.	--	90
Subsp. Rad.	--	(87)
66 下顎角幅	(91)	--
69 オトガイ高	(35)	33
69(3) 下顎体厚	(14)	14.5
70 a 下顎頭高	54	--
71 a 最小下顎枝幅	35	--
8/1 頭長幅示数	(76.1)	81.9
17/1 頭長高示数	(71.76)	76.0
17/8 頭幅高示数	94.0	92.9
47/45 顔示数(コルマン)	--	87.1
54/55 鼻示数	--	52.0

表2 四肢骨計測値(女性)

	第1号人骨		第2号人骨	
	左	右	左	右
大腿骨				
骨体中央矢状径	(25)	(26)	(26.5)	
骨体中央横径	(26)	(21.5)	(21.5)	
骨体中央周	(76)	(74)	(76)	
骨体上横径	(27)	28	--	
骨体上矢状径	(22)	23.5	--	
上骨体断面示数	81.5	83.9	--	
骨体中央断面示数	96.2	120.9	123.3	
脛骨				
中央矢状径	(26)	--	29	
中央横径	19	--	20.5	
骨体周	70	--	81	
栄養孔部の横径	21.5	--	25	
栄養孔部の矢状径	(28.5)	--	33	
脛示数	75.4	--	75.8	

表3 頭蓋計測値比較(女性)

	第1号人骨	第2号人骨	地下式墳人(n) (松下ら, 1983)	畿内古墳人(n) (島・寺門, 1957)
1 頭蓋最大長	(176)	171	176.8 (5)	171.8 (8)
8 頭蓋最大幅	134	140	140.0 (3)	138.4 (4)
17 Ba - Br 高	126	130	130.8 (5)	129.0 (4)
8/1 頭長幅示数	(76.1)	81.9	--	80.1 (7)
17/1 頭長高示数	(71.6)	76.0	73.6 (3)	75.1 (3)
17/8 頭幅高示数	94.0	92.9	--	92.2 (4)
45 頬骨弓幅	--	132	134 (1)	128.8 (4)
47 顔高	--	115	109.0 (7)	115.6 (5)
47/45 顔示数(K)	--	87.1	81.3 (1)	89.8 (4)

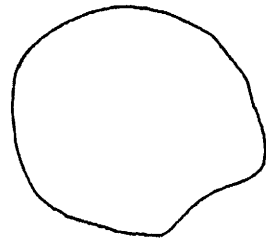
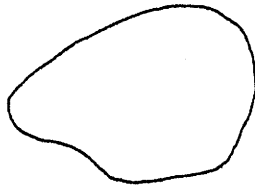


第 7 图 金倉上地下式墳人骨配置图
西都市教育委员会原图改变

第 1 号

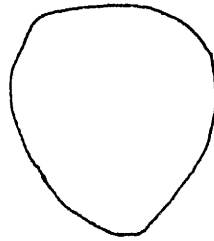
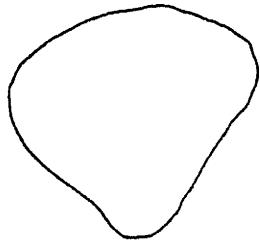
第 2 号

上 部

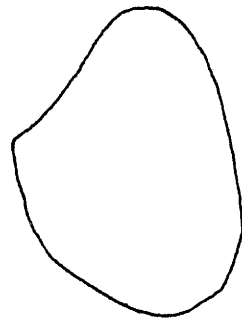
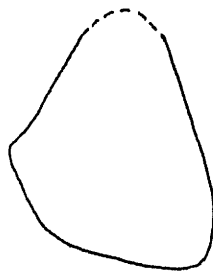


大腿骨

中 央

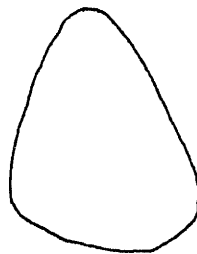


栄養孔部



脛 骨

中 央



第 8 図 大腿骨、脛骨の横断形

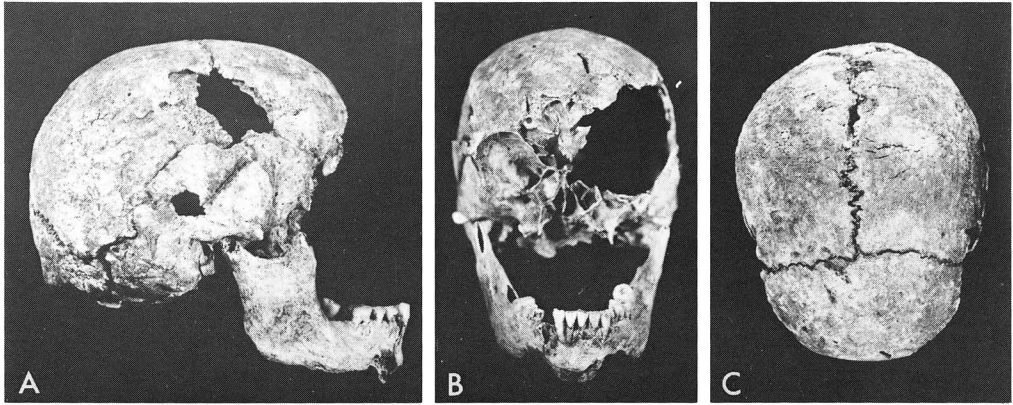


写真1 第1号頭蓋 (女性・壮年)

A. 側面 B. 前面 C. 上面

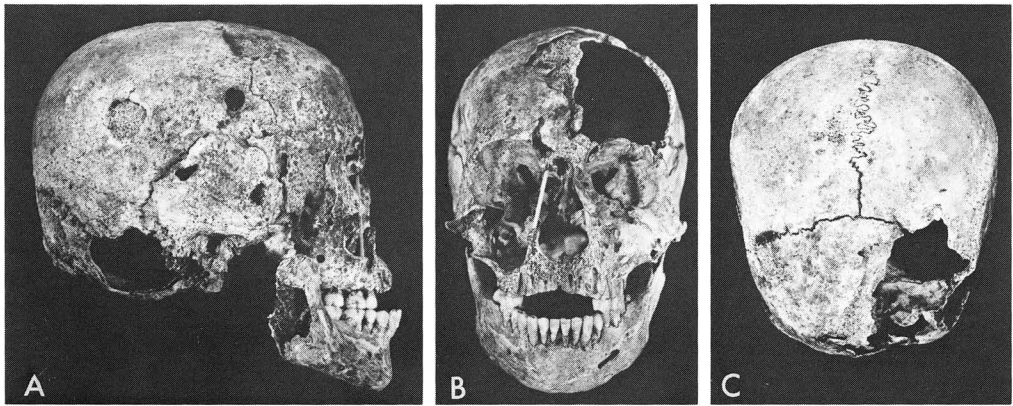


写真2 第2号頭蓋 (女性・若年)

A. 側面 B. 前面 C. 上面

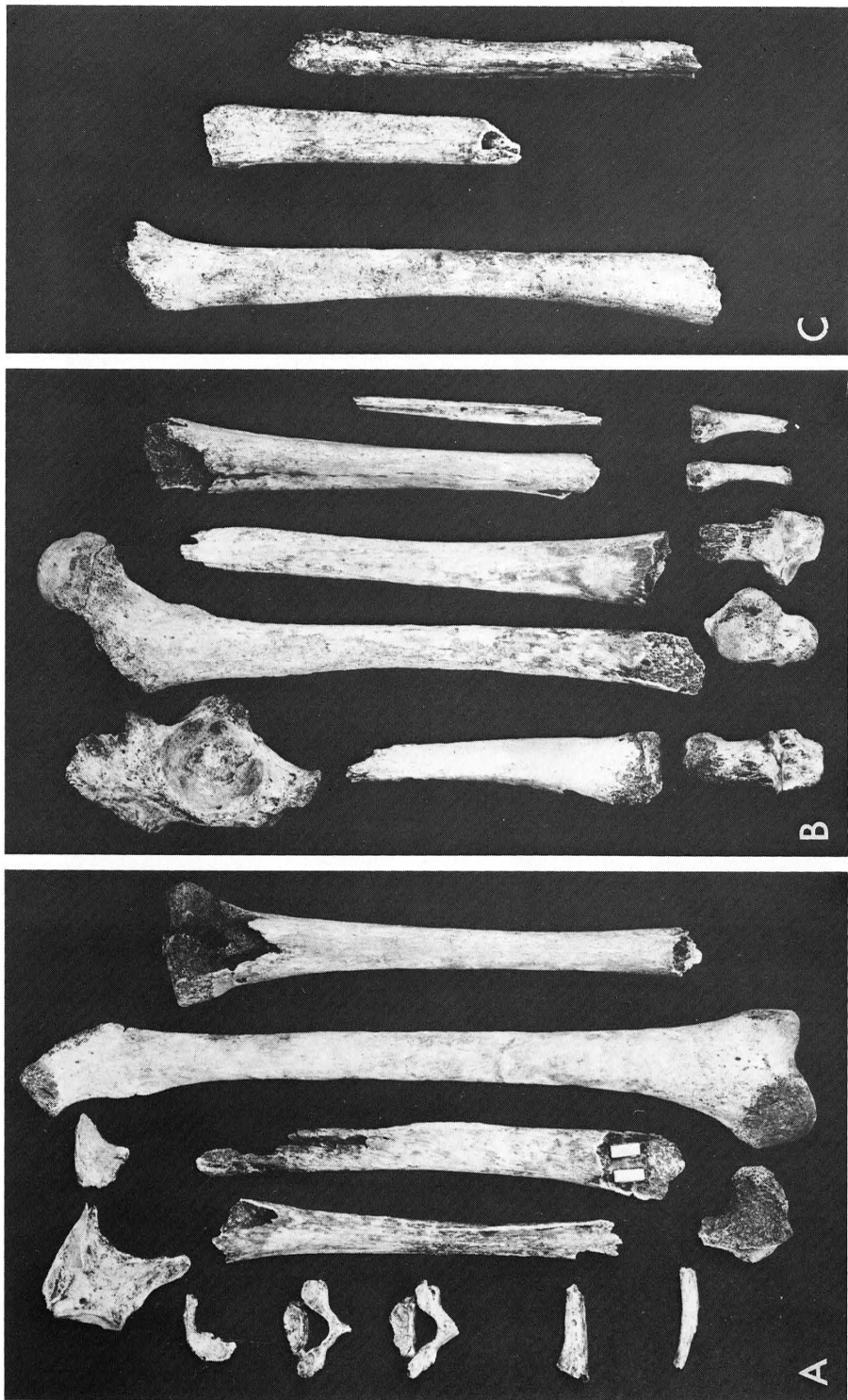


写真3 体幹・四肢骨 A. 第1号 B. 第2号 C. 第3号

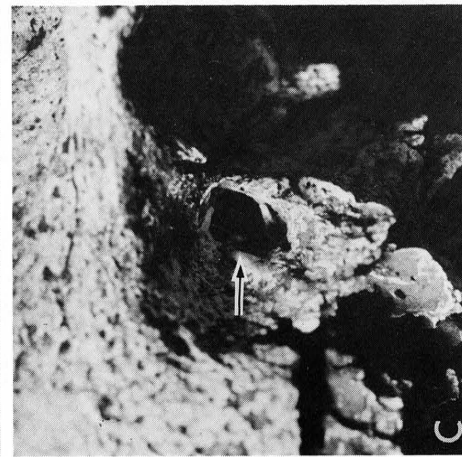
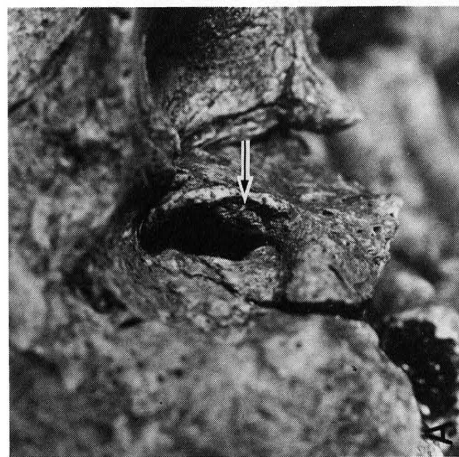
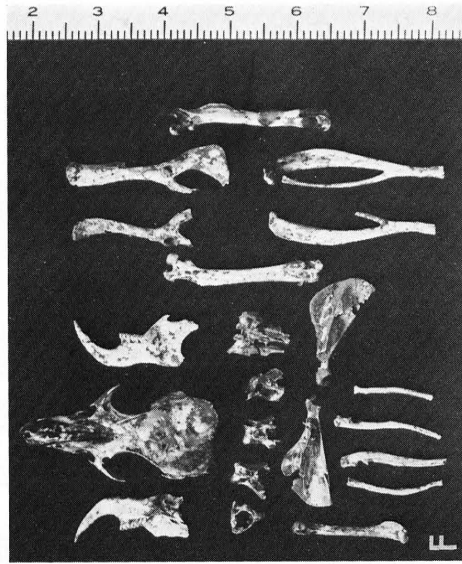
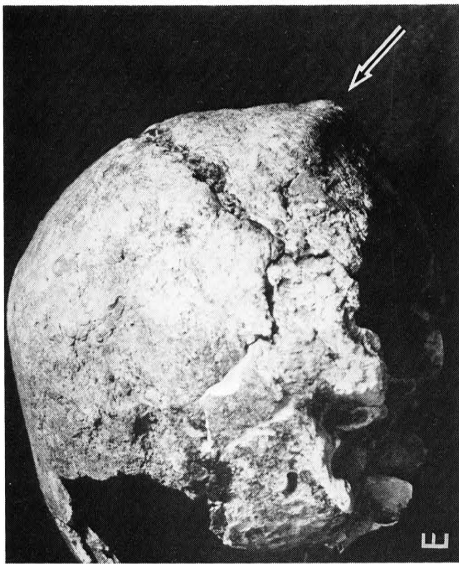


写真4 A. 外耳道骨瘤 (第1号右) B. 外耳道骨瘤 (第1号左) C. 外耳道骨瘤 (第2号右)
 D. 外耳道骨瘤 (第2号左) E. 後頭隆起 (第1号) F. アカネズミ骨格 (第2号伴出)

寺原第1遺跡1号住居址

寺原第1遺跡1号住居址

1. 遺跡の位置と歴史的環境

寺原は西都原古墳群台地の西辺に位置し、標高約70m、平坦な洪積層丘陵上の集落である。ところでこの寺原集落のほぼ中央部の土地所有者押川宗生氏の家屋建築に伴う事前調査として、西都市教育委員会西都原古墳研究所が昭和58年9月26日から10月14日まで発掘調査を行った。この寺原は西都原古墳群台地上の唯一の古い集落であり、そのことを立証するかのよう^①に寺原一帯は弥生土器片が全面に散布し、また高塚墳も10数基点在している。

なおこの寺原という地名からも理解できると思うが蔵骨器も出土したことがあり、古代の廃寺址も埋蔵されているのかもしれない。

それからこの寺原西方丘陵上（事勝塚の上方）では昭和23年4月、東京大学文学部助教授駒井和愛氏を団長とする日向考古調査団^①によって発掘調査が行われた。

調査は特に八幡一郎氏をリーダーにして筆者らも調査に参加した。そして、調査結果は弥生後期から終末期にかけての遺跡が確認された。

また、この遺跡の北方約400mの所には有名な男狭穂塚、女狭穂塚の両巨大古墳がその雄姿を誇っている。なおこの寺原から直ぐ北の方に連なる丘陵上付近には男狭穂、女狭穂両塚の陪塚と推定される169号墳、170号墳、171号墳なども散見される。

またその先の方には西都原資料館が建っている。

いずれにしても寺原集落は西都原古墳群地帯にあるということで今後とも古代重要集落地域として、その解明に取り組まなければならないと思う。

2. 遺 構

発掘調査は押川氏の所有地750㎡の地域を対象地として、トレンチを入れることにした。

まず2m×28mのトレンチを3本南側から入れてAトレンチ(A.T)、Bトレンチ(B.T)、Cトレンチ(C.T)、と名称づけたが、C.Tの北側は西都原の方から山路へ通ずる市道が走っている。

まず、A.Tから発掘を始め、B.T、C.Tへと順次に掘り進んだところ、C.Tの中央部過ぎの位置から方形状を呈した黒色土の区画が出現したので、その地区を拡大して発掘したところ住居址が発見された。また、この地点の地層は表土にあたる黒色腐蝕土が25cm、次に黒色土が15cm、さらにアカホヤ層が28cm、そして黒褐色硬質土層が約30cmとなっている。

この地層を上部よりⅠ層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層と名づけることにしたが、ちょうど住居址の壁に相当する部分がⅢ層、住居址の床面がⅣ層の上部にあっていた。またこの3本のトレンチの東側約5mの所に溝状遺構も確認された。以下この住居址と溝状遺構について述べてみたいと思う。

a. 住居址

住居址は方形状プランを呈しているが、北側がわずかに広がっている。東西5.8m、南北は北辺6m、南辺5.2mで多少ひずみを有する住居址である。

この遺構は表土から40cm掘り下げたアカホヤ層に黒色方形に現われたので住居址遺構と推定したわけであるが、さらにこの黒色土を25cm～30cm掘り下げると竪穴式の住居址が出現した。そしてこの住居址内には東側と西側の中央部壁面から、それぞれ長さ約80cm、幅（中央部）約75cmの舌状の突出部が設けられていた。

この突出した遺構が何を目的にして造られたものか明確ではないが、間仕切りを意味するものであれば住居址内を2ヶ所に区分したものとみなされる。

また住居址床面の中央部分からは、ほぼ等間隔に柱穴が4ヶ所検出できた。これらの柱穴は深さが1m～1.2mと相当に深く、その径も、それぞれ約25cm前後あったので、この竪穴住居の建築物は、だいぶ堅固であったことが窺われる。

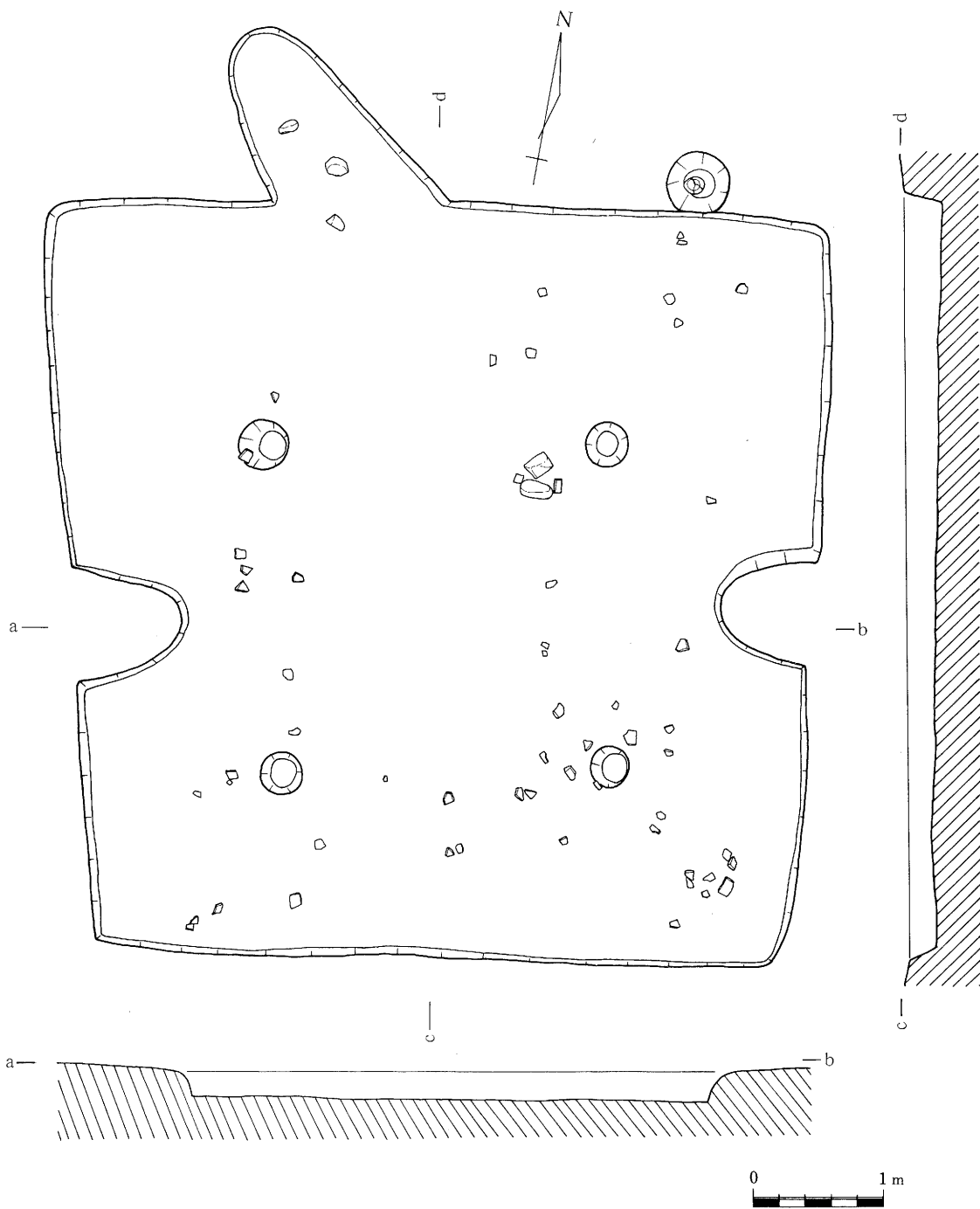
なお住居址北辺から北西へ向け、長さ1.6m、幅1mの楕円形状土壌が斜めに突き出ているが、この遺構が住居址と直接関連性を有するか否かについては、最初Ⅲ層のアカホヤ層に住居址が黒色方形に現われた段階で、この土壌の延長線が約1m幅で住居址内に黒色で延びているのが認められたけれども、竪穴部分を掘り下げた後、その痕跡は消え失せたので、竪穴住居構築以後に掘り込まれた遺構であることが判明した。

またその土壌内からは何らの遺物も発見されなかったので、一層、後世的な遺構であることが確認できた。

b. 溝状遺構

住居址のすぐ東側に、A.T、B.T、C.T、を南北に横切るようにして幅1m～1.1m、深さ22cm～25cmの溝状遺構が一直線に、この遺跡全域に通っていたがこの遺跡は、恐らく市道を越した北の方および南側にも、それぞれ延びているものと推測される。この遺構の長さは遺跡の南北両端一杯に23.5m確認できた。

この溝の内部は床面の中央部分が平坦になり、両側は反り上っていた。それからこの溝状遺構の中央部分と南端の両地点で土器片が少量発見された。焼成などからみて住居址内出土の土器片に類似しているけれども器形を把握できる土器片が検出されなかったので明確には



第9図 寺原第1遺跡 1号住居址実測図

なし得ないが、大体、住居址と同一年代とみなしてよいと思う。

ところでこの溝状遺構は南北にわたり、相当に長く設けられていると推察できるが、では何ゆえこのような溝がつくられているのか究明しなければならない。

この寺原集落が溝状遺構の西側に立地していること、そして寺原全域に弥生後末期から古墳時代にかけての遺跡が分布していることなどから考えられることは、この寺原古代集落を区切る一種の環溝的遺構かもしれないと思われる。このことは今後この溝状遺構の直線上の部分的発掘調査によって、解明しなければならない課題でもある。

3. 出土遺物

遺物は土師器など含めて計198点が出土しているが、ほとんど破片である。住居址内67点、住居址外2点、溝状遺構内66点、一括63点である。

縄文土器 (第10図 1. 2)

縄文土器は住居址内から5点出土しているが、いずれも数cmの胴部破片である。1は内面に2は外面に条痕が残っている。

これらの土器片と同様なものは寺原地域各所から出土しており、住居址内に混入したものと思われる。

弥生土器

甕形土器 (第10図 3. 4. 5)

3は口縁部破片で、大きく外反し、端部は平担になっている。内外面ヨコナデ調整で、胎土に2mm前後の粒子を含み、焼成は良好である。

4は底部付近から胴部にかけての破片で器厚はわりに厚く、内外面ナデ調整である。胎土はあらく4mm前後の粒子を含み、焼成は不良である。

5は底部の破片で、内外面ななめ方向のハケ目調整である。3mm前後の粒子を多量に含み、焼成はやや不良である。

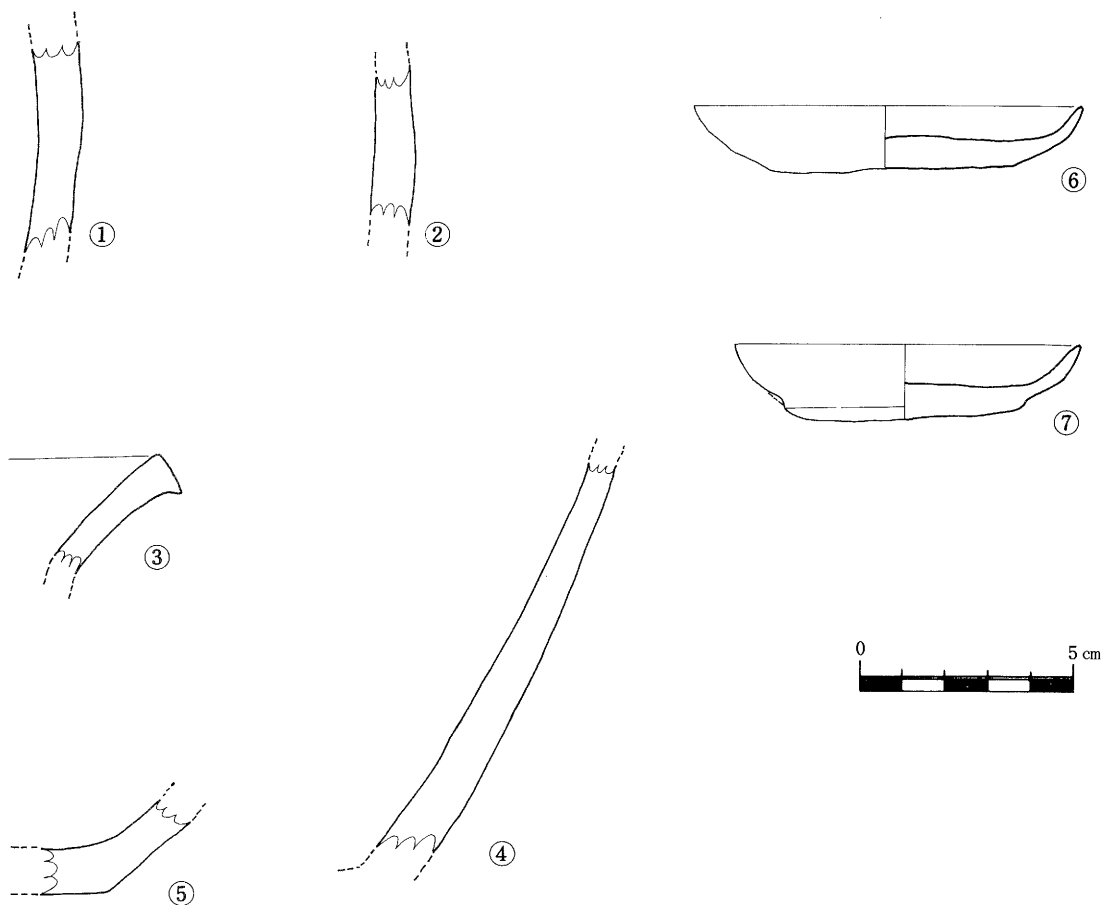
土師器

皿 (第10図 6. 7)

6. 7は重なって出土したもので、6は推定口径9.2cm、器高1.6cm、完形に近い皿である。底部径は5.5cmで湾曲しながら口縁に至っている。口縁部は薄く、端部はまるい。底部にかけてしだいに厚くなっている。内面は丁寧なヨコナデ調整であるが、外面はあらい。胎土に微砂粒を含み、焼成は良好である。

7は口径8.2cm、器高1.8cm。口縁部の半分程を欠損している。底部径は5.5cmで湾曲し

ながら口縁に至っている。口縁部は薄く、端部はまるい。底部にかけてしだいに厚くなっている。内外面ともヨコナデ調整で、胎土に微砂粒を含み、焼成は良好である。



第10図 寺原第1遺跡 出土遺物実測図

- ① . ② 縄文土器 ⑥ . ⑦ 皿 (土師器)
 ③ ~ ⑤ 甕 (弥生土器)

4. ま と め

以上、寺原第1遺跡の1号住居址を中心にして論及してきたが、前述したように、この遺跡の北西約200mの丘陵上一帯の寺原遺跡を昭和23年4月7日～18日まで、日向考古調査団によって発掘調査され、弥生終末期の遺跡を確認することができた。住居址は明確にすることはできなかったが、出土遺物の点から考察して、この寺原第1遺跡と同年代と推測される。それで、この寺原集落一帯には弥生時代終末期前後の遺跡は今後も発見される可能性が十分にあると思われる。

ところで寺原第1遺跡で発見された1号住居址は内部に突出部を有する方形プラン形式のものであるが、最近、この様式の住居址が県内各地で確認されるようになり、また分布地域も県内の全地域へ広がっている。そして、このような方形状住居址に張り出しが施され、あるいは突出部が設けられるか、また県内中部以南には花卉状住居址という特殊形式の住居址も方形状住居址群に混在するようになる。このように現在では弥生終末期前後の時期に全国的にみても極めて特殊な住居址が発見されていることは注目しなければならない。

それでこの「日向型」とでもいうべき地域性のある住居址について、もう一度、これまでの調査経過を振りかえりながら論述してみたいと思う。

これまでの発掘調査において、日向型特殊形式住居址の初現は昭和30年6月、宮崎考古学会を中心とした川南町把言田遺跡調査^②においてである。この発掘調査において2ヶ所に住居址が出現し、その第1号住居址は方形状の4辺からそれぞれ方形の張り出しが設けられ、また第2号住居址は第1号以上に4隅が変形していた。われわれ調査員も初めての発見例であったので、極めて興味をそそられたのである。

特に第1号住居址について石川恒太郎氏は調査報告書の中で、小室を4隅に付加している住居址を西都原169号墳出土の子持家形埴輪に関連づけて論証され、竪穴住居の特殊な構造から家形埴輪のような4隅に小室をもつ家へと進展したと考えることができると述べられている。この把言田遺跡の年代も弥生末期の年代で、弥生土器編年V様式に相当する。

また筆者らが昭和41年6月、発掘調査した高鍋町の持田遺跡においても、弥生後半から末期にかけての住居址が2ヶ所発見されたが、その2号住居址は方形状を呈してはいるが3辺ともに変化のある特殊な形式をしており、日向型特殊形式出現の初現の様相を具現しているものと推測される。ところでこの寺原の1号住居址のような方形プラン内に相対して内側に突出部を有する住居址は、昭和50年10月、野尻町大萩遺跡^③1号住居址で初見されたが、その4号住居址においては突出部が片方だけで、他は外に向って張り出していた。

この大萩1号住居址の両側突出部について、田中茂氏は仕切壁、出入口の踏段の役割をも

っていたと述べておられる。これは住居の間仕切りを意味するものと思う。その後昭和52年9月には都城市丸谷第④遺跡1号住居址、2号住居址において、1号は住居址内部への突出部3ヶ所、2号も変則ではあるが3ヶ所設けられていた。そして、特に丸谷1号出土の弥生土器は寺原第1遺跡出土の土器に類似しており、年代的にも同時期の弥生終末と推定される。

次いで昭和55年9月、都城市祝吉遺跡においてY-1号住居址では内部突出遺構が3ヶ所そしてY-2号住居址では2ヶ所の突出部がそれぞれ付設されていた。この祝吉遺跡については2次調査として昭和56年9月に発掘調査が行われたが、その時発見された住居址の中にも内部突出部を有する方形住居址が2ヶ所発見された。

それから昭和55年度から開始された宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査においては、昭和57年6月～9月、熊野原遺跡B地区において3号住居址、7号住居址は寺原第1遺跡と同様、相対する2ヶ所突出部遺構を有していたが、第4号住居址は突出部が1ヶ所しか存在せず、この1ヶ所の突出部が果してどのような機能を有していたのか明確になし得ない。

また熊野原遺跡の2次調査において、13号住居址は突出部が相対して2ヶ所あったが、そのほかの10号、16号、18号の各方形住居址内には、それぞれ突出部は1ヶ所しか付設されていない。1ヶ所では間仕切りの意味は失われるわけである。

それからこの突出遺構を有する住居址の分布圏の問題であるが、昭和52年11月から12月にかけて発掘調査された延岡市の野田八田遺跡の住居址は変形方形形状を呈し、その南東側に外側に向けて突出部が造られていた。この住居址は先に述べた持田遺跡の住居址の形態に類似している。

さらに昭和59年6月、発掘調査した日向市の越シ⑨2号遺跡、1号住居址においても突出遺構が1ヶ所出現した。この住居址は地形の関係上、全面調査をなし得なかったが、あるいは1ヶ所ではなく、寺原1号住居址のように相対する両突出型住居址であったかもしれない。しかも構築年代は土器編年の考察から弥生終末期頃に想定される。

以上、寺原第1遺跡1号住居址に関連のある県内遺跡について述べてきたが、これらの遺跡出土の弥生系土器は、大体、安国寺式系統の土器が多く、年代も弥生末期から終末期の時期に比定されそうである。

ところで、この突出遺構について、最近「日向型間仕切り住居」という名称づけもされているようであるが、突出部が1ヶ所しかない場合、また矩形の張り出しを有するもの、さらに花卉状住居址あるいは変形住居址など各種変化に富んだ特殊形式住居址が多く散見できるので、各種の変化に対応できるよう、ここでは一応「日向型住居」と称したい。この住居形式については、今後、古代建築学関係者の意見を組み入れながら様式設定を行うべきであ

と思う。

註

1. 駒井和愛・桜井清彦「宮崎県児湯郡西都市寺原及び寺崎の遺跡」『高千穂阿蘇』神道文化会．昭和55.12
2. 石川恒太郎「川南町把言田遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第3輯．昭和33.3.
3. 宮崎県教育委員会『大萩遺跡』(2) 1975.
4. 面高哲郎「丸谷第1遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(3) 1979.
5. 都城教育委員会『祝吉遺跡』第1集都城市文化財調査報告書．1981.
6. 前掲5に同じ『祝吉遺跡』第2集都城市文化財調査報告書．1982.
7. 宮崎県教育委員会『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』(Ⅲ) 1982.
8. 前掲7に同じ『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』(Ⅳ) 1983.
9. 越シ2号遺跡については日向市教育委員会の緒方博文氏よりご協力を願った。

上 野 遺 跡

上野遺跡 1 号

1. 調査の経緯と環境

昭和48年度から着工された一ツ瀬川土地改良事業は、宮崎県においてもかつて例のない大規模な事業であり、関連地域も西都市、高鍋町、木城町、新富町の1市3ヶ町にまたがるものである。そして、受益面積も8196ヘクタールという広大な地域に及んでいる。

ところでこの事業の一環として、茶臼原台地上の上野地区において国営西都原幹線水路工事に伴う事前調査を昭和58年11月28日から12月8日まで、西都市教育委員会の西都原古墳研究所が担当して行った。上野地区は標高130m茶臼原台地の北辺に位置し、一ツ瀬川が貫流する穂北平野を挟んで西方は有名な西都原の大古墳群台地と相対する眺望絶佳の地である。

またここからすぐ台地を西に下った所に西都原の鬼の窟古墳と同様の横穴式石室を有する国指定の千畑古墳がある。そしてこの千畑古墳の約100m南側丘陵傾斜面には寄せ棟造り形式の内部構造を主とした10数基の横穴墓が存在するが、中でも最近発見された1号横穴墓^①の玄室内部は半肉浮彫りの4本柱を有する寄せ棟構造の様式であり、全国的にみても例のない貴重なものであった。

さらにこの上野地帯から茶臼原台地の中央部にかけては前方後円墳の兎屋根塚をはじめ55基の古墳が散在している。この茶臼原古墳群も昭和48年に国の史跡指定をうけている。

またこの上野の古墳群地帯を北東へ約3km行くと、木城町百合野の小古墳群、さらに東行して小丸川を渡り、西別府台地上に上ると国史跡指定の川南古墳群が展開している。なお、この遺跡のすぐ西側には23号・24号の柄鏡式古墳が台地に沿って並んでいる。

この上野遺跡は茶臼原台地上の上野地区で傾斜して高くなっている屋根上に立地しており、その南側はすぐ断崖となって急傾斜し一ツ瀬川岸へと連なっている。

2. 遺 構

まず幹線水路の予定線上に、南北に2m幅で長さ200mのトレンチを入れることにした。ところがこの予定線上の尾根上に低い不整形盛り土様の起伏が認められたので、そこを重点にしながらか北側から発掘を進めた。

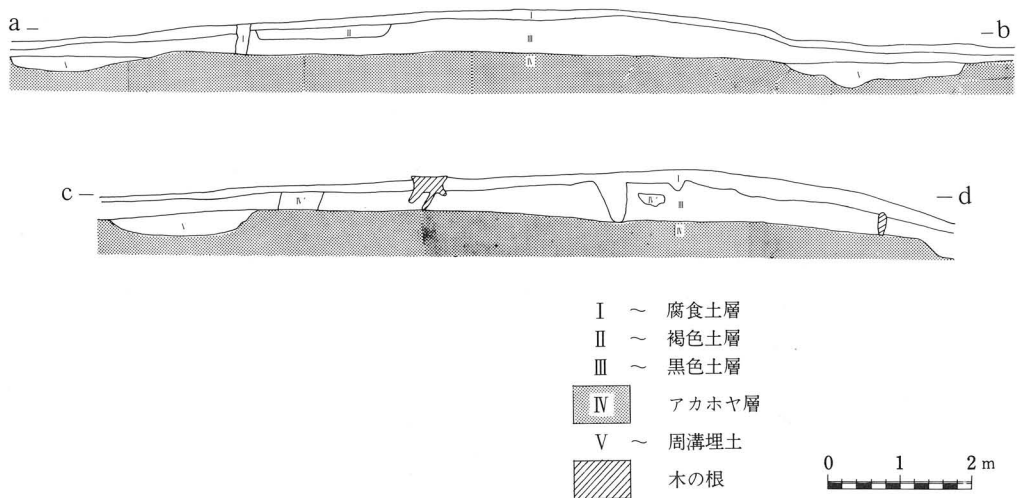
トレンチ内からはほとんど遺物、遺構も発見されなかったため、尾根上の小盛り土に主力をおいて発掘調査することにした。この盛り土は極めて低く、中央部でも約60cm位の高さしかなかったため当初はこの起伏が果して人工的なものか否か断定できなかった。それでトレ

ンチをこの盛り土に延ばし表土を掘り進むと、その中央部の盛り土表面から約30cm掘り下った層位から底部などの土器片がわずかではあるが検出された。

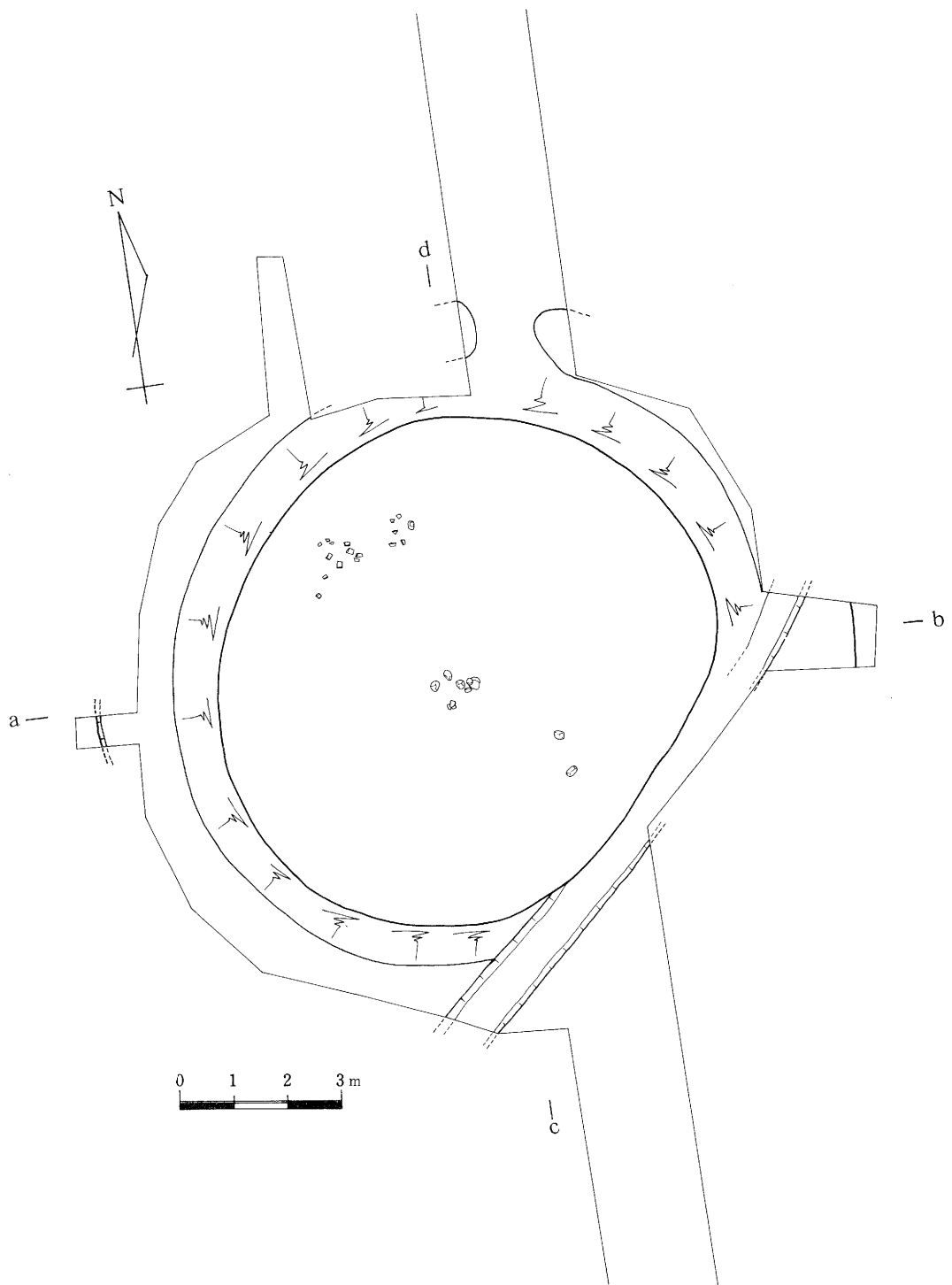
それから、さらに掘り下げると赤褐色土の固い地盤が出現し出した。それでこの面を拡大していくと、9.8m × 8.3 m の楕円形台上部が確認できた。この盛り土を調査するに際しては円形墳の崩壊されたものではないかということを目測していたのであるが、予想に反して特殊遺構が現われたので戸惑った。またこの円形の台上部からは約80cm～1 m 幅で、緩やかな傾斜をもつ削り取りが施され、その周囲は約1.4m～1.5mの周溝がめぐらされていた。

しかしこの周溝は深さ約20cmの極めて形式的な遺構であった。またこの周溝内からも少量の土器片が出土したが、その土器片は盛り土内から発見された土器類と胎土、焼成なども全く同一系統のものと思われる。それから周溝は北側で、約1 m 間隔をおいて陸橋部が設けられていた。それでこの遺構は結局、円形周溝墓と称することができるが、一般的な円形周溝墓とはその内部遺構が異っているようである。

なおこの周溝墓の南側に接触して直線の溝状遺構が長さ約10m、幅90cm、深さ約20cmで確認されたが、その西側、周溝と切り合った地点にも土器片が出土した。



第11図 上野遺跡1号断面図



第12図 上野遺跡1号実測図

3. 出土遺物

遺物は土器片 113 点が出土している。円形周溝墓内 109 点、一括 4 点であるが、ほとんどが胴部破片で、器形が判明できるのは数少ない。

壺 (第13図 1. 2)

1 は小型壺の口縁部破片で、口径 6.1 cm、数条の沈線をめぐらし、頸部は縮っている。内外面ともヨコナデ調整である。胎土に 2 mm 前後の粒子を多量に含み、焼成は良好である。

2 は二重口縁壺形土器の口縁部破片である。口縁端部は平坦で、内外面ヨコナデ調整である。胎土に 2 mm 前後の粒子を多量に含み、焼成は良好である。

甕 (第13図 3. 4)

3 は脛部付近の破片で、直径 1 cm の円形浮文を有している。内外面ともヨコナデ調整である。

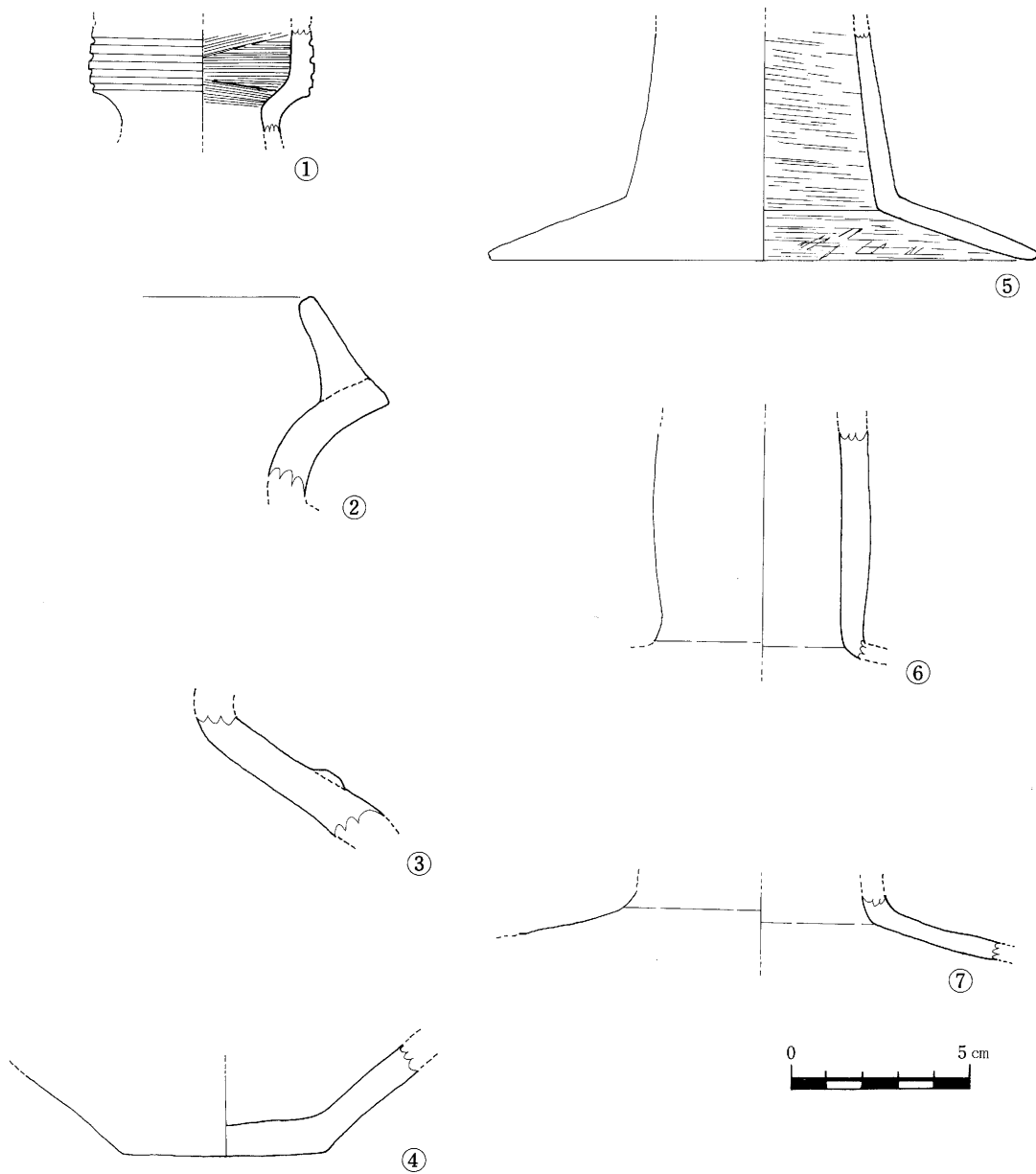
4 は底部破片で、平底である。内外面ともヨコナデ調整で、胎土に 2 mm 前後の粒子を多量に含み、焼成はやや不良である。

高杯 (第13図 5. 6. 7)

5 は口縁部の全部及び胴部・脚部の半分を欠損している。推定底部径 15.2 cm、脚部と胴部には境をもち、脚部は「ハ」字状に、胴部はすぼまりながら立ちあがっている。外面はナデ調整のあとヘラ磨き、内面はヨコナデ調整である。胎土に微砂粒を含み、焼成は良好である。

6 は脚部破片である。器形は 5 に類似すると思われるが、内外面ともヨコナデ調整、胎土はあく 2 mm 前後の粒子を多量に含み、焼成もやや不良である。

7 は胴部破片で 6 と同一個体と思われる。



第13図 上野遺跡出土遺物実測図

① ② 壺 ③ ④ 甕 ⑤~⑦ 高杯

4. ま と め

以上、上野遺跡1号について論述してきたが、不整形な盛り土を発掘調査した結果、高塚墳系統の墳墓ではなく円形周溝墓が出現した。そしてその円形台上部には約1m前後の傾斜をした削り取りが施され、周囲には浅い周溝もめぐらされていた。また興味深いことは、その台上部には土壙などの埋葬遺構は何も認められず平坦になっていたことである。

この盛り土の高さが中央部で約60cmあり、その中間層位、表土から約30cmの所で土器片が確認できたこと、そして発掘開始時には盛り土上中央部分の地層が少し下っていた。そのことは、もしかすると被葬者をこの盛り土内に埋葬したのかもしれない。

従来の円形周溝墓は一般的に盛り土はなく地表面と台上部の高さは同一になっている。この上野遺跡のすぐ東側までは戦前、陸軍軍馬補充部の用地で立ち入り禁止区域地帯でもあったので古来の地形がそのまま保存され、今日まで盛り土が残存したのであろう。それで一応円形周溝墓と名称づけをしているが、多分に原始墳墓的要素も有している。

ところで宮崎県内での円形周溝墓の初現は昭和55年2月、川南町東平下遺跡発見の円形周溝墓である。この調査は筆者も関係して行われたのであるが、以前から川南の大弥生遺跡群の中に周溝墓の遺跡と推定される地層が確認されており、それを根拠にして発掘調査を進め、県内最初の円形周溝墓発見ということになった。この周溝墓の径15m、周溝の幅、約1~1.4mとなっているが、この場合は中心の円形台上部の高さと地表面は同一レベルであり、しかも東平下遺跡は台上部中央に長さ2.4m、幅1.5mの土壙墓が確認され、内部には長さ約70cmの直刀も発見されている。

この東平下円形周溝墓には上野遺跡1号のような傾斜面の削り取り遺構などは全く存在せず、またその上部に盛り土が存在した形跡はなかった。いずれにしてもこの東平下遺跡の円形周溝墓は出土の土器類などから考察して弥生終末期前後の年代に推定され、九州中で調査された円形、方形周溝墓では最も古い年代のものであった。

この東平下地区には上記の周溝墓以外にも数基の円形周溝墓が確認されているが、さらに昭和52年2月には同じく川南町丸山西原遺跡で円形周溝墓1基が発見されている。また極く最近も周溝墓が発掘調査された。そして注目されることは、これら円形、方形の周溝墓が発見された地域が児湯郡、すなわち古代の子湯県一帯であるということである。

では次に、小丸川を挟んで西方に、川南台地と相対する茶臼原台地の^③上野遺跡円形周溝墓の年代について述べてみたい。この遺跡の編年的考察をする対象になる土器類がわずかしか出土していないので明確な立証はできないけれども、全般的に感じられることは、日向以外の外来系土器群の影響を多分にうけているということである。

日向地方における弥生終末期には安国寺系統文化の強い伝統が浸透しているが、この上野遺跡1号においても、頸部に円形浮文を有する甕形土器片なども出土して安国寺系統の要素がみられないこともないが、ここでは同じ豊後水道地帯の大分市守岡遺跡の土器群に類似性を有しているようである。そしてさらに、守岡遺跡などに深い関連を有しながら中部瀬戸内系および畿内庄内系統土器群などからの影響もうけているようでもある。

それで年代的には、一応、弥生終末期に次ぐ古式土師器の時期初頭前後に比定してみた。しかし乏しい資料に基づく考証であるので、さらに次年度の上野遺跡2号の論考において1号円形周溝墓を含めて、さらに論及してみたいと思う。

註

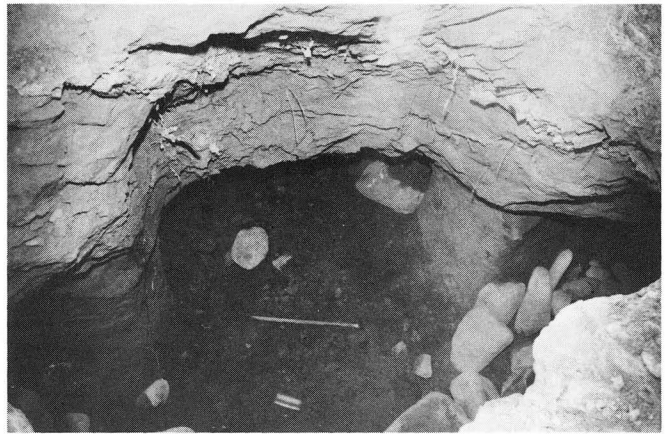
1. 千畑横穴墓の確認調査を西都原古墳研究所が担当して昭和59年11月から開始した。
2. 日高正晴「東平下1号円形周溝墓」『川南町史』昭和58.10.
川南町教育委員会『東平下周溝墓群—2号方形周溝墓』1982.3.
3. 「東平下A遺跡(周溝墓群)」『川南町の埋蔵文化財—遺跡詳細分布調査報告書』1983.3.
4. 「丸山西原遺跡」前掲3の報告書に同じ
5. 羽田野光洋「東九州における弥生式土器研究Ⅰ—安国寺式土器の再検討」
『古文化談叢』第5集. 1978
6. 羽田野光洋「大分市守岡遺跡」『古文化談叢』第5集. 1978.

圖

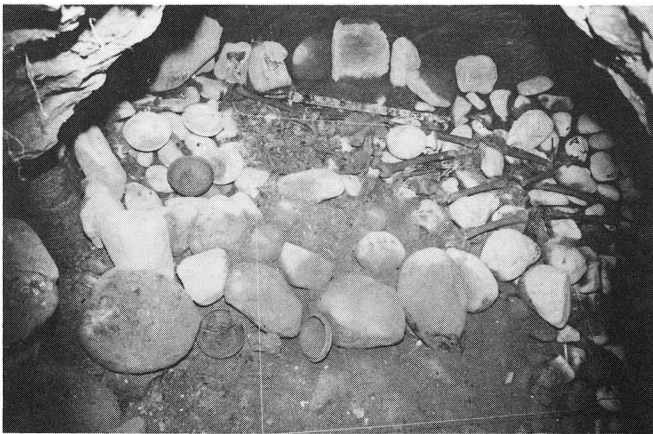
版



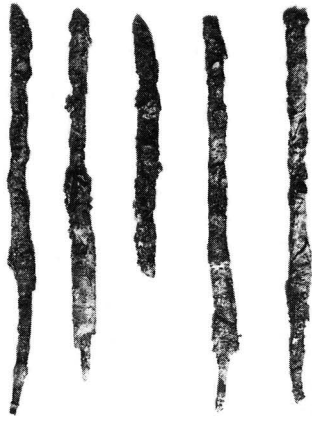
北水戸地下式墳陥没地



北水戸地下式墳内部



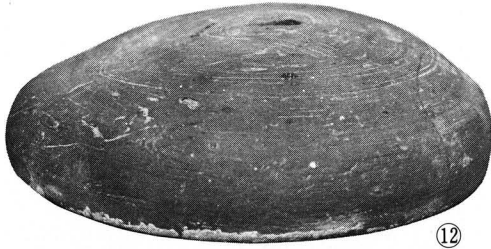
北水戸地下式墳遺物出土状況



⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪



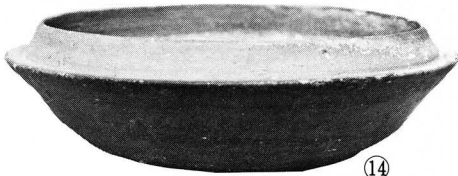
② ③ ④ ⑤ ⑥



⑫



⑬



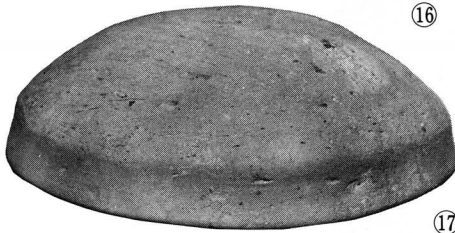
⑭



⑮



⑯



⑰



⑱

北水戸地下式墳出土遺物



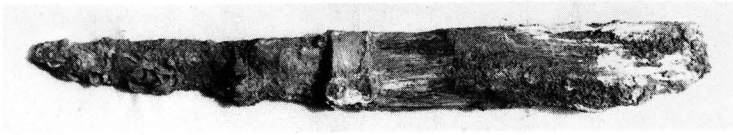
金倉上地下式墳陷沒地



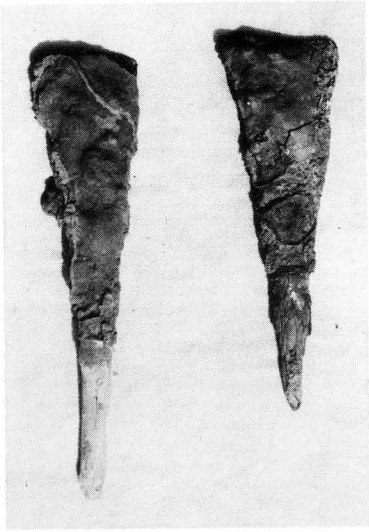
金倉上地下式墳内部



金倉上地下式墳遺物出土狀況

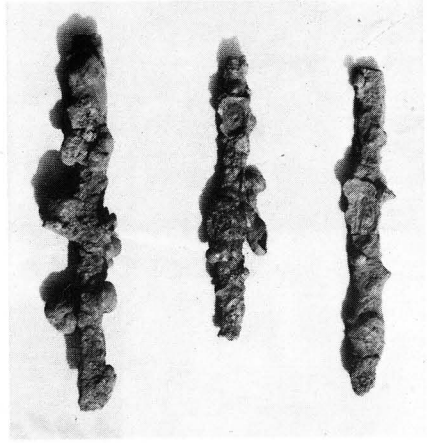


①



②

③



④

⑤

⑥



⑦



⑧



⑨

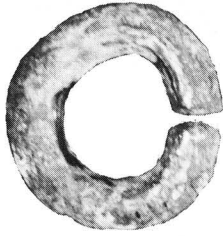
金倉上地下式墳出土遺物



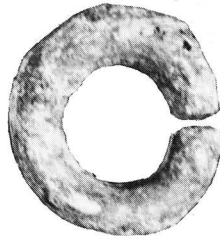
⑩



⑪



⑫



⑬

金倉上地下式墳出土遺物



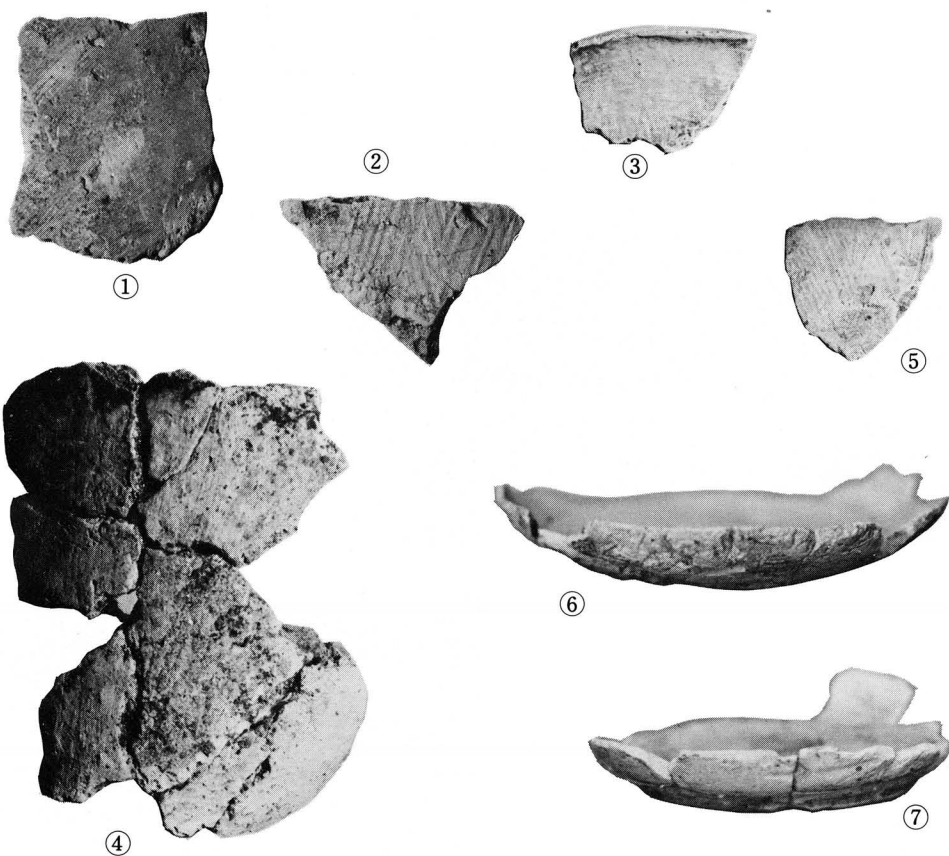
寺原遺跡近景

寺原遺跡1号住居址

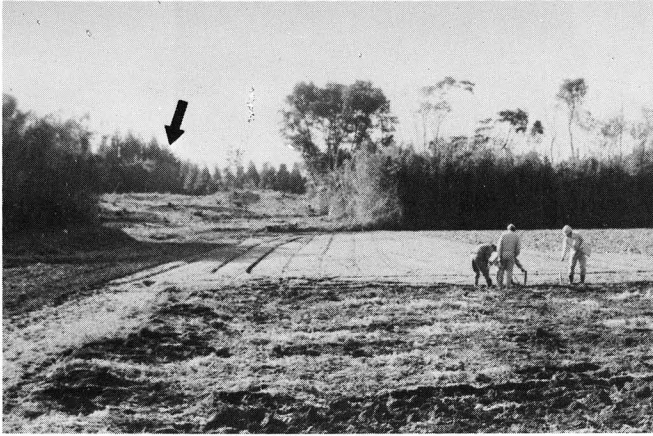




寺原遺跡溝状遺構



寺原第1遺跡出土遺物



上野遺跡遠景



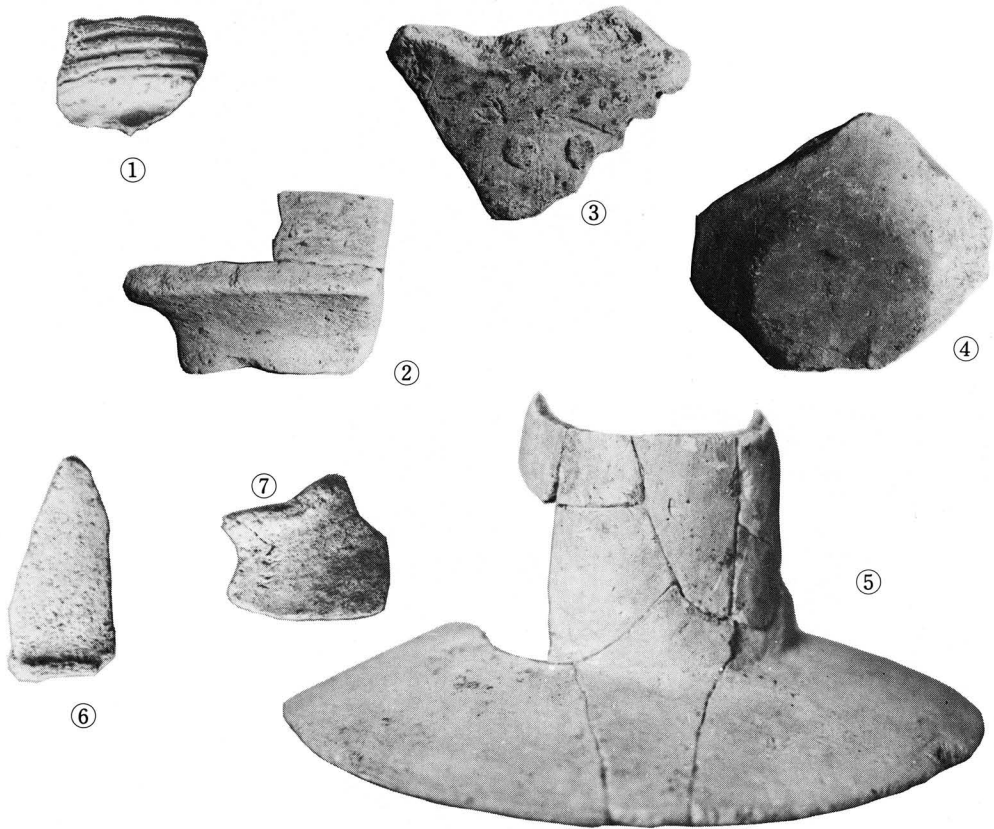
上野遺跡近景



上野遺跡発掘状況



上野遺跡 1 号



上野遺跡 1 号出土遺物

西都市 埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集

発行年月日 昭和60年5月1日

編集 西都原古墳研究所

発行 西都市教育委員会

印刷 なかむら印刷所
